

「学生による授業評価」に基づく
授業報告書

2023 年度

聖心女子大学

目次

第1章 学生による授業評価の概要	1
第2章 専任教員による授業報告書	17
第3章 学科・専攻による授業報告書	
英語文化コミュニケーション学科	54
日本語日本文学科	55
史学科	57
人間関係学科	58
国際交流学科	60
哲学科	62
教育学科 [教育学専攻・初等教育学専攻]	63
心理学科	66
第4章 聖心女子大学グッドティーチャー賞の推薦	69
参考資料 2023年度 専任教員授業報告書（回答フォーム）	

第1章 学生による授業評価の概要

1. 実施対象科目

2023年度の学生による授業評価は、2022年度に続き、Google フォームを用いたオンライン回答形式に変更した

2023年度に授業評価が行われたのは385科目であった。内訳は専任教員による授業が123科目（前期80科目、後期43科目）で、非常勤による授業が262科目（前期141科目、後期119科目、集中2科目）であった。学生の有効回答者数は延べ9,004名となるが、実施科目のうち、教員の指示なく回答したと思われる科目については集計の対象外とした。

コロナ禍前の2019年度は全体で475科目行われたのに対し、2021年度は241科目と半減したが、2022年度は380科目と数字は改善されてきた。ただし、専任教員による授業評価数は2019年度の78科目から2021年度の93科目、2022年度の110科目と増加傾向であったが、2023年度は123科目とさらに増加し、オンラインで実施したことの効果があがっている。非常勤の授業評価実施数は2022年度から研究室を通しての告知などを行ったところ大きく改善したが、2023年度は頭打ちとなり、2022年度から伸びが認められない。また、オンライン回答以前の2019年度は475科目であったことを考えると、非常勤の授業評価の実施については別な方法を検討する必要がある。

2. 実施方法

学生による授業評価はGoogle フォームで実施した。学生は教員の指示に従い、各自Google にアクセスして回答する。回答は無記名で、時間は10分～15分程度であった。

（1）専任教員実施方法

授業評価は原則、Google フォーム上に回答する形式で行われた。回答率向上のため評価予定の科目についてできるだけ授業時間内に回答するよう周知する。授業時間内に実施が難しい場合は「明日の17時まで」など期日を指定して対応する。教務課で集計を行い、各授業の単純集計と自由記述部分を担当教員にフィードバックする。教員はそのデータを自身で管理し年度末に授業報告書を作成する。尚、リアクションペーパー・教員個人で作成したアンケートなどで実施の場合は、教務課を通さず教員自身で対応する。

（2）非常勤講師実施方法

実施予定科目を選択式で実施（※非常勤は選択式のみ）することを学生に指示し、回答率向上のためできるだけ授業時間内に回答するよう周知する。授業時間内に実施が難しい場合は「明日の17時まで」など期日を指定して対応する。教務課で集計を行い、調査結果データ及び自由記述部分は後日郵送する。

（3）前年度からの変更点などについて

2021度はSophie（教務管理システム）を用いて専任教員と非常勤講師に分けて実施について周知したが、回答数が増えず、全体で241科目、6,273名の有効回答数であった。そこで、2022年度

からは実施についてのお知らせを Sophie に掲示するだけでなく、研究室を通じて紙媒体で配付をしている。また、実施についてのお知らせに QR コードを記載するようにした。

専任の先生には学内メール、非常勤の先生には Sophie に「メールあり」で調査期間中 2 度ほど実施について掲示した。2022 年度からは授業評価の告知を Sophie に掲示するだけでなく、研究室を通じて紙媒体で配付した。また、前年同様、専任の先生には学内メールを送信、非常勤の先生には Sophie に「メールあり」で調査期間中 2 度ほど Sophie に実施について掲示した。その結果、上記で示した通り、専任教員の授業評価実施数は 22 年度の 110 科目から本年度の 123 科目へと増加した。一方、非常勤講師の評価実施数は 22 年度からの伸びは認められず、紙媒体で評価を実施していた時期の数字に戻る兆しは認められない。ただし、授業評価に参加した学生数については 22 年度の 8,023 名から本年度の 9,004 名へと 1000 名ほどの増加が認められた。

3. 評価内容

Google フォームでの質問内容は以下の通りである。

- Q1. この授業への出席率はどのくらいでしたか。
- Q2. この授業のために平均何時間程度、予習・復習をしましたか。(本やインターネットで調べるなども含む)
- Q3. 受講前からこの授業の内容に興味・関心があった。
- Q4. 総合的にみて、この授業に満足した。
- Q5. シラバスの記載内容は、この授業を受講するうえで役に立った。
- Q6. 教員の説明の仕方、話し方はわかりやすかった。
- Q7. 授業中に使う教材(テキスト・配布資料・映像など)は学習の役に立った。
- Q8. 毎回の授業内容の分量や速度は適切だった。
- Q9. 教員の授業運営(質問や発言の十分な機会、私語の注意など)は適切かつ公正だった。

各設問への回答選択肢は次の通りである。

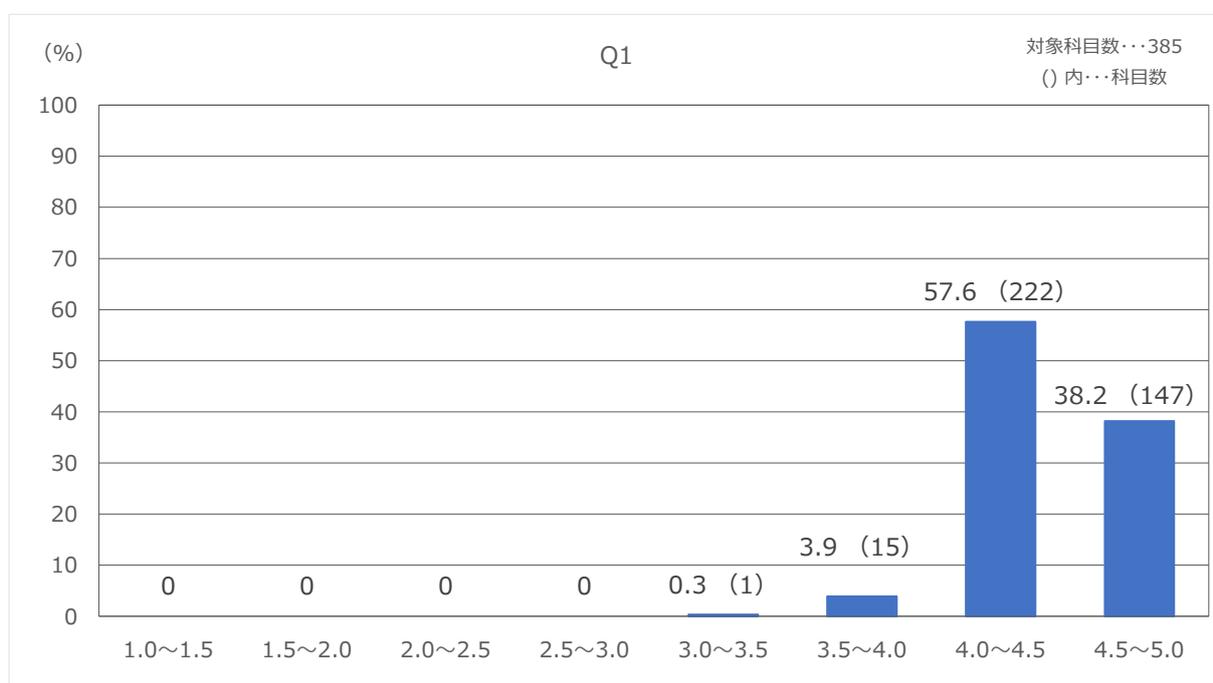
Q1 については、「すべて出席した、1~2 度欠席したがほとんど出席した、3分の 2 程度出席した、3分の 1 程度出席した、ほとんど出席しなかった」の 5 段階で、Q2 については「2 時間以上、1~2 時間、30 分~1 時間、30 分以下、0 分」の 5 段階で回答を求めた。その他の質問については、「よくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの 5 段階で評価してもらった。

4. 各設問への回答結果

各授業について学生の回答の平均値を算出し、その平均値の分布を以下の図で示している。以下、順に見ていく。

(1) この授業への出席率はどのくらいでしたか

全体として「ほとんど出席以上」を意味する 4.0 以上の比率が 9 割 5 分を超え、出席状況は良好である。ただし、前回の 2022 年度では「4.5～5.0」の比率が 66%であったが、2023 年度は 38.2%と半減しており、欠席をした経験のある学生が増えている。尚、コロナ禍の 2021 年度は「4.5～5.0」の比率が 9 割であったことを考えると、学業以外の活動が一段と活性化したことも一つの理由と考えられる。今後の推移にも注目していきたい。

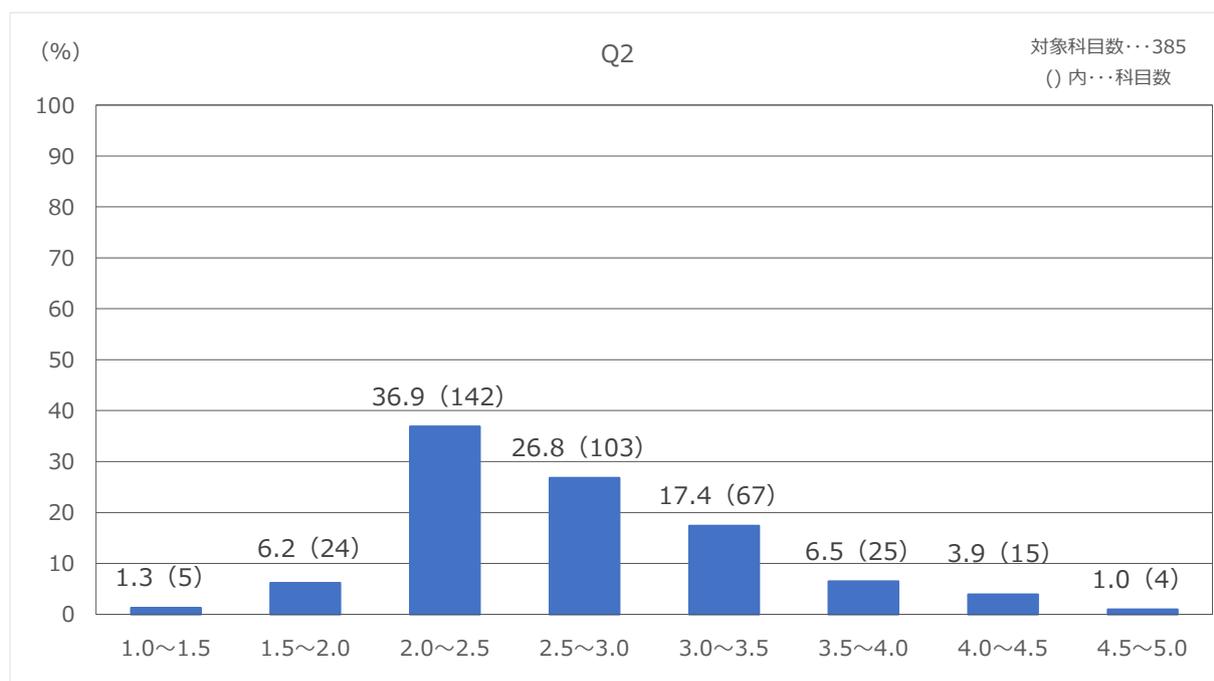


Q1. この授業への出席率はどのくらいでしたか。

5. すべて出席した 4. 1～2 度欠席したがほとんど出席した 3. 3分の2程度出席した
2. 3分の1程度出席した 1. ほとんど出席しなかった

(2) この授業のために平均何時間程度、予習・復習をしましたか。(本やインターネットで調べるなども含む)

回答の状況から学生が「週 30 分以下」から「30 分～1 時間」程度の予習、復習をした授業 (2.0～2.%) が中心となる分布である。2022 年度に比べると大きな変化は無いが、それでも 2022 年度は「2.0～2.5」が 30%であったのに対し 2023 年度は 37%へと増加し、「1.5～2.0」の授業も 3%から 6%へと若干ながら増えている。このような予習・復習時間の減少傾向は 2021 年度から継続しているが、出席状況の変化とも合わせ 2024 年度のデータを注目したい。

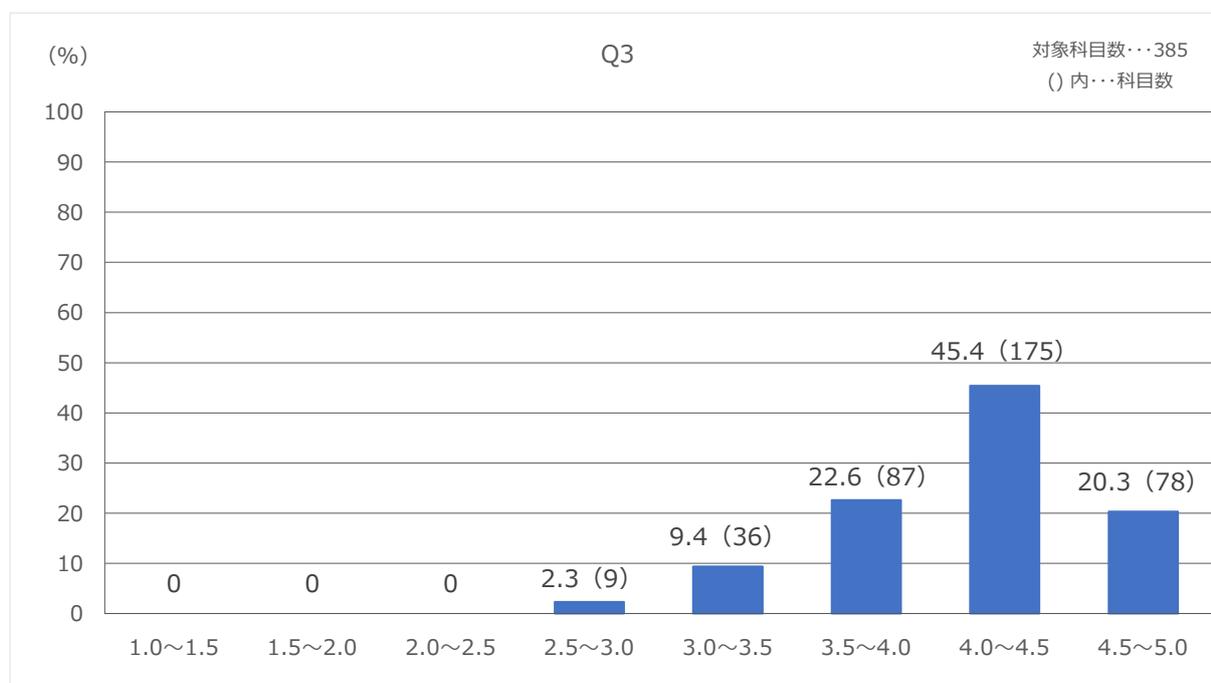


Q2. この授業のために平均何時間程度、予習・復習をしましたか。(本やインターネットで調べるなども含む)

5. 週 2 時間以上 4. 週 1～2 時間 3. 週 30 分～1 時間 2. 週 30 分以下
1. 週 0 分

(3) 受講前からこの授業の内容に興味・関心があった

「受講前からこの授業の内容に興味・関心があった」という項目に当該授業がどの程度あてはまるかを尋ね、受講前の授業への学生の関心度とした。平均が4.0以上、すなわち、「ある程度あてはまる」から「よくあてはまる」と評価された授業が全体の7割強と多かった。2021年度、2022年度との大きな変化は見られない。

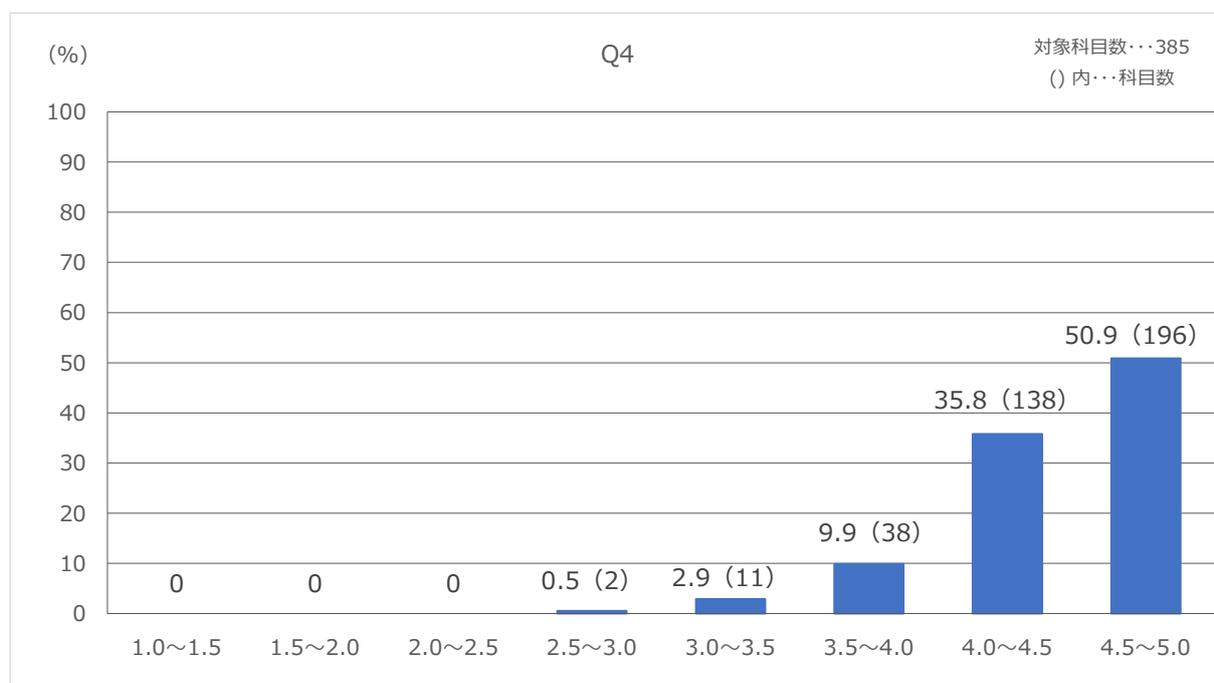


Q3. 受講前からこの授業の内容に興味・関心があった。

- | | | |
|---------------|----------------|--------------|
| 5. よくあてはまる | 4. ある程度あてはまる | 3. どちらともいえない |
| 2. あまりあてはまらない | 1. まったくあてはまらない | |

(4) 総合的にみて、この授業に満足した

「総合的にみて、この授業に満足した」との項目に当てはまる程度を尋ね、授業への満足度とした。学生の評定の平均が4.0以上、すなわち、「よくあてはまる」と「ある程度あてはまる」の間に学生の平均がある授業が9割弱と多かった。2022年度と比較しても大きな変化は認められない。

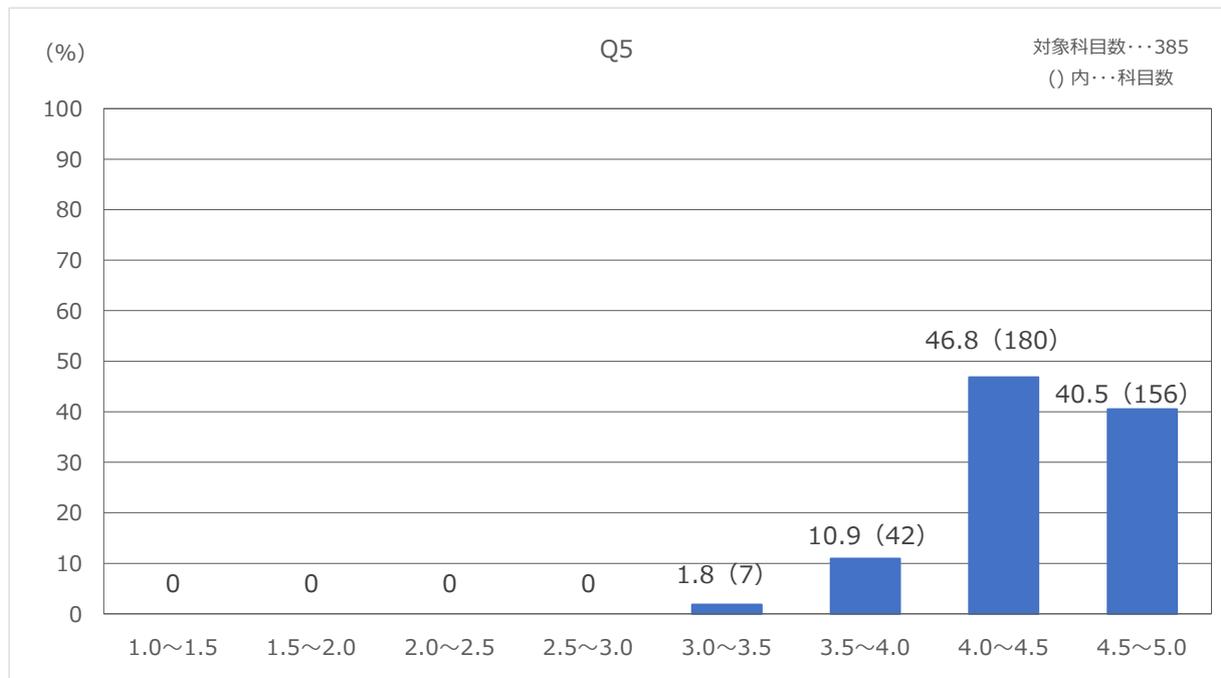


Q4. 総合的にみて、この授業に満足した。

5. よくあてはまる 4. ある程度あてはまる 3. どちらともいえない
2. あまりあてはまらない 1. まったくあてはまらない

(5) シラバスの記載内容は、この授業を受講するうえで役に立った。

「シラバスの記載内容は、この授業を受講するうえで役に立った」の項目への当てはまる程度を尋ね、シラバスの記載内容への評価とした。学生の評価が、4.0以上、つまり「ある程度当てはまる」以上と評価された授業が全体の9割弱と多く、学生はシラバスに概ね満足している。この結果は2022年度とほとんど変化はないが、それはシラバスが改善されていないことも意味している。

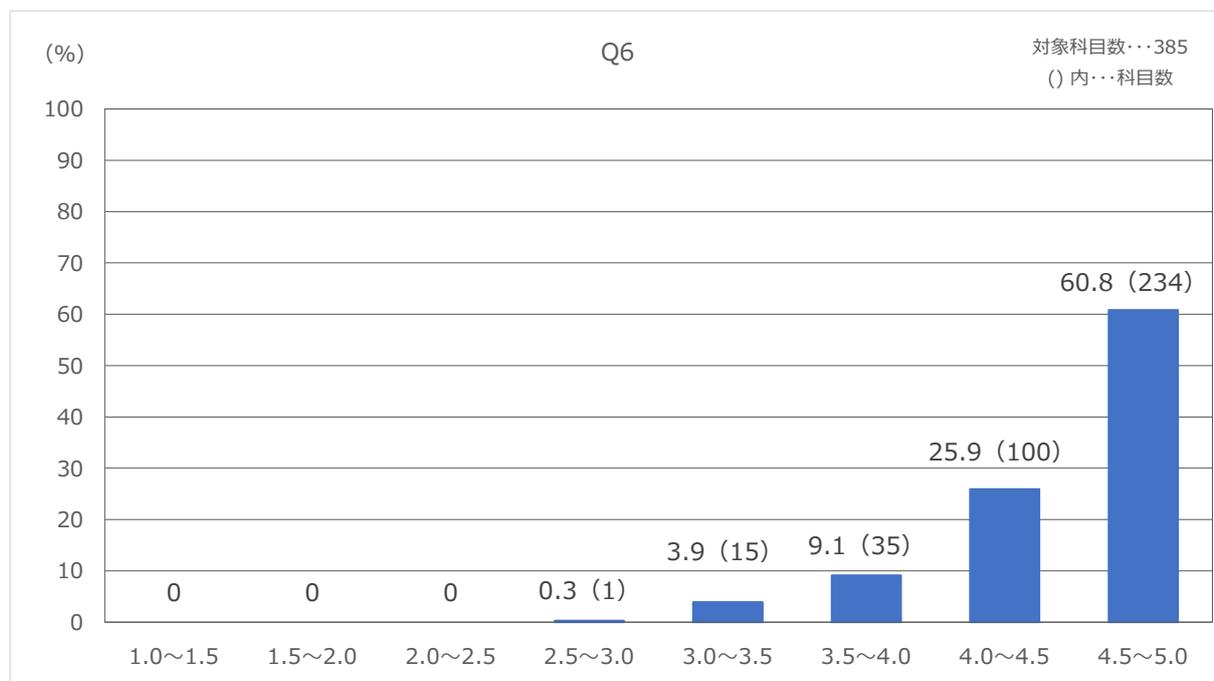


Q5. シラバスの記載内容は、この授業を受講するうえで役に立った。

- | | | |
|---------------|----------------|--------------|
| 5. よくあてはまい | 4. ある程度あてはまる | 3. どちらともいえない |
| 2. あまりあてはまらない | 1. まったくあてはまらない | |

(6) 教員の説明の仕方、話し方はわかりやすかった

「教員の説明の仕方、話し方はわかりやすかった」の項目への当てはまる程度を尋ね、教員の説明への評価とした。学生の平均の評価値が「4.5～5.0」の授業が全体の6割を占め、「4.0～4.5」を合わせると9割弱を占めている。全体に評価の高い授業が多く、この数字も2022年度とほぼ同じであった。

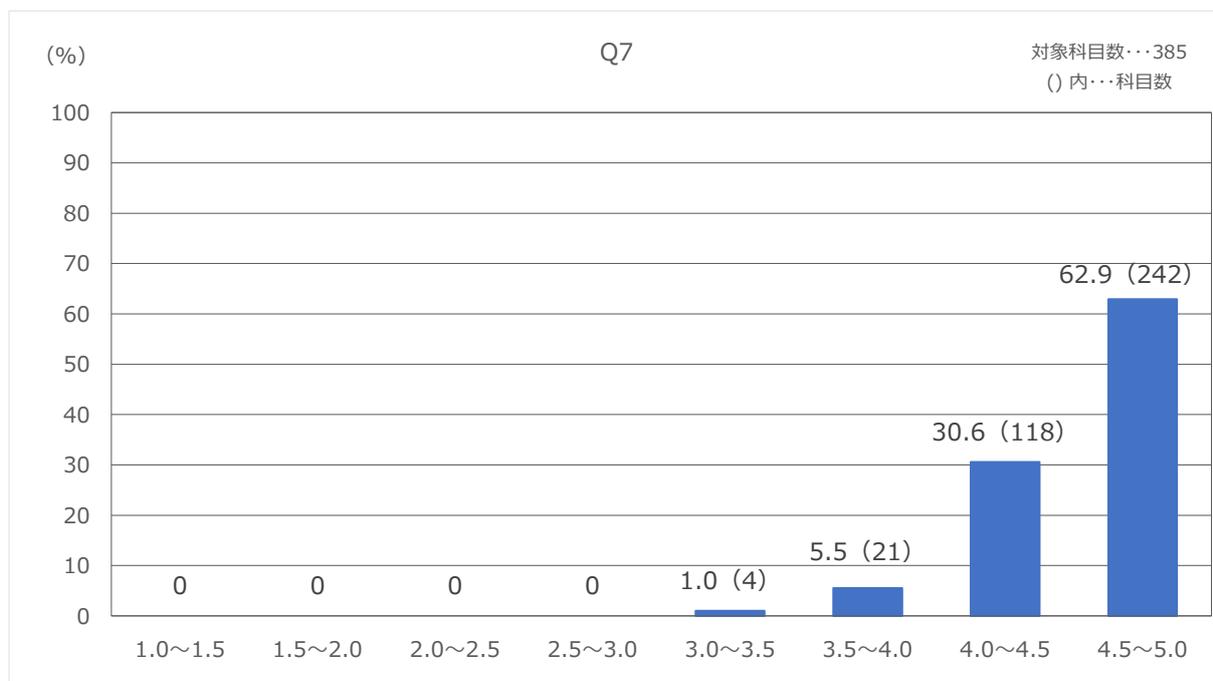


Q6. 教員の説明の仕方、話し方はわかりやすかった。

- | | | |
|---------------|----------------|--------------|
| 5. よくあてはまる | 4. ある程度あてはまる | 3. どちらともいえない |
| 2. あまりあてはまらない | 1. まったくあてはまらない | |

(7) 授業中に使う教材（テキスト・配布資料・映像など）は学習の役に立った

「授業中に使う教材（テキスト・配布資料・映像など）は学習の役に立った」の項目にあてはまる程度を尋ねた。学生の平均値が「4.5～5.0」の授業が全体の63%と高く、「4.0～5.0」を合わせると9割を超えている。ただし、昨年度は「4.5～5.0」の比率が67%であり、わずかではあるが低下が見られた。今後の推移に注目したい。

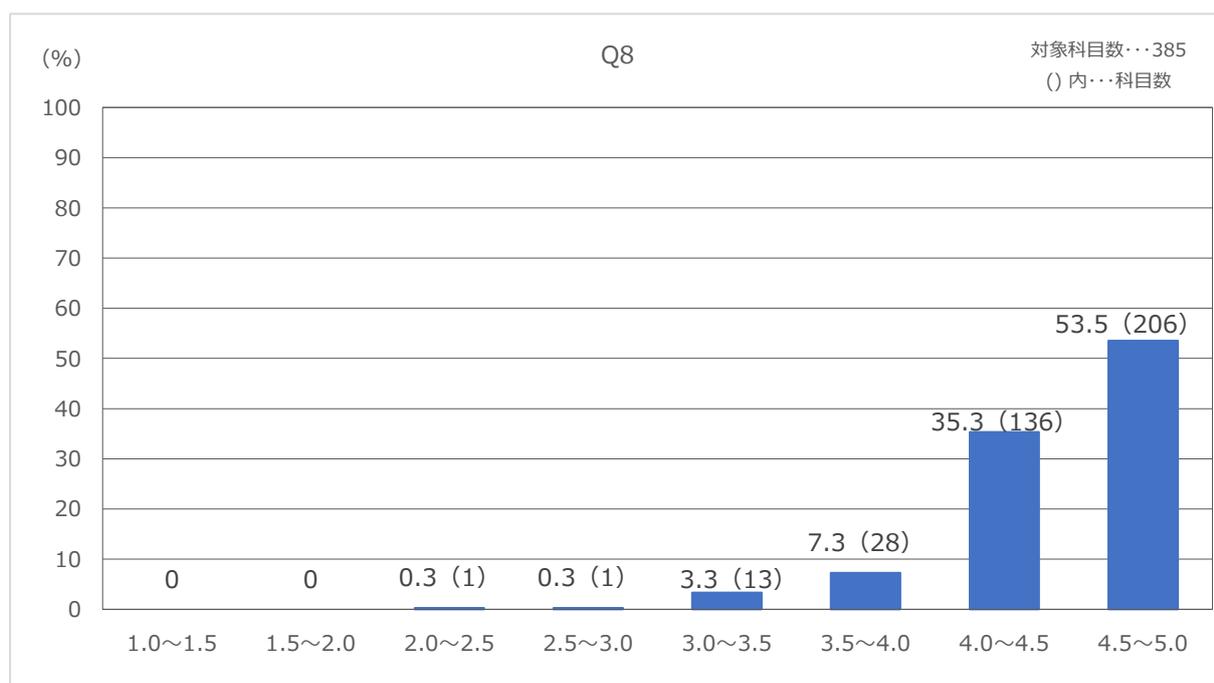


Q7. 授業中に使う教材（テキスト・配布資料・映像など）は学習の役に立った。

- | | | |
|---------------|----------------|--------------|
| 5. よくあてはまる | 4. ある程度あてはまる | 3. どちらともいえない |
| 2. あまりあてはまらない | 1. まったくあてはまらない | |

(8) 毎回の授業内容の分量や速度は適切だった

「毎回の授業内容の分量や速度は適切だった」の項目に当てはまる程度を尋ねたところ、平均値が4.5以上、「ある程度当てはまる」から「当てはまる」と評価された授業が、全体の54%であり、平均値で4以上の授業も9割を占めている。学生は授業の分量や速度に満足しているようであるが、「4.5～5.0」の比率が2022年度の58%からわずかに減少している。この点についても、今後の変化の動向に注意したい。

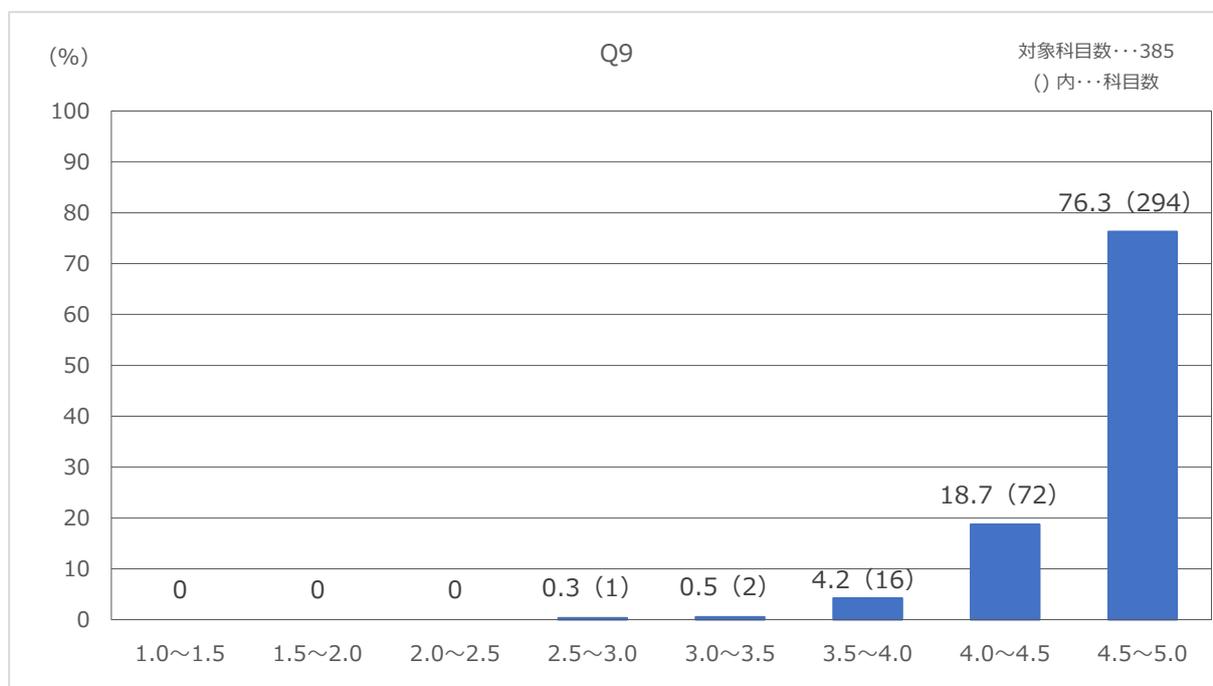


Q8. 毎回の授業内容の分量や速度は適切だった。

- | | | |
|---------------|----------------|--------------|
| 5. よくあてはまる | 4. ある程度あてはまる | 3. どちらともいえない |
| 2. あまりあてはまらない | 1. まったくあてはまらない | |

(9) 教員の授業運営（質問や発言の十分な機会、私語の注意など）は適切かつ公正だった

「教員の授業運営（質問や発言の十分な機会、私語の注意など）は適切かつ公正だった」に当てはまる程度は「4.5 から 5.0」と高い授業が全体の 76%を占めて多かった。ただし、2022 年度は 82%であり、ここでもわずかながら学生の満足感は低下している。今後の推移を見守りたい。



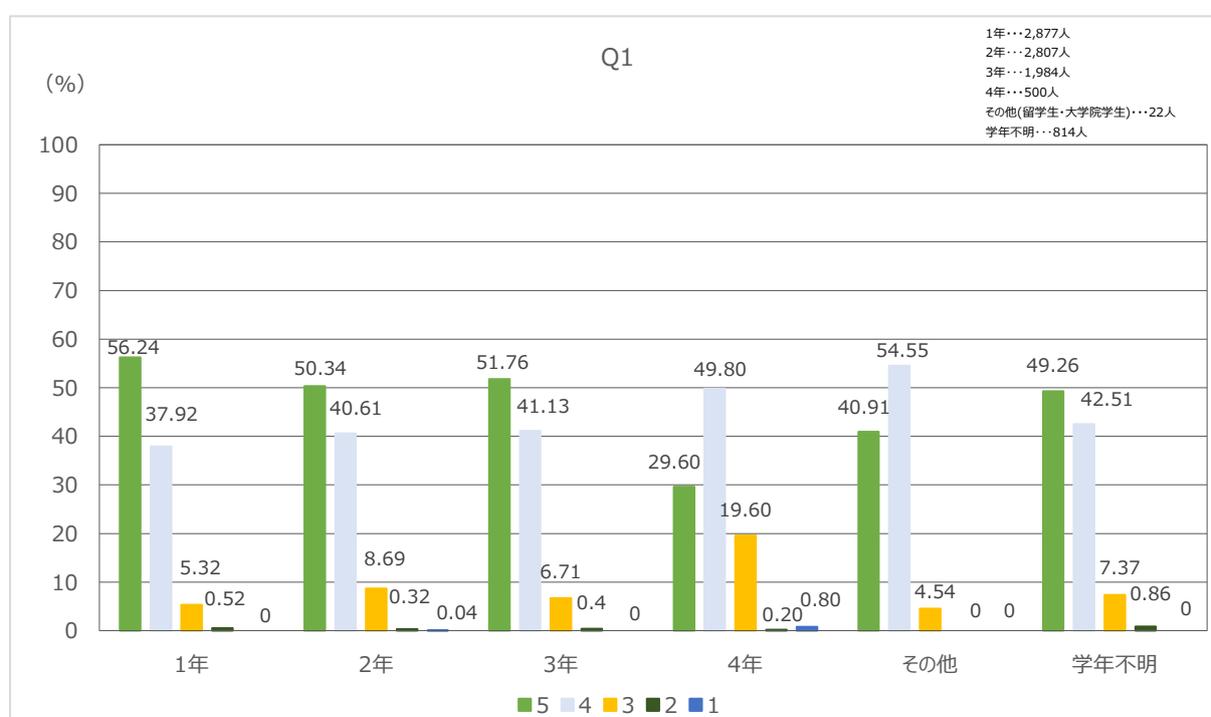
Q9. 教員の授業運営（質問や発言の十分な機会、私語の注意など）は適切かつ公正だった。

- | | | |
|---------------|----------------|--------------|
| 5. よくあてはまる | 4. ある程度あてはまる | 3. どちらともいえない |
| 2. あまりあてはまらない | 1. まったくあてはまらない | |

5. 学年別の選択肢平均回答比率

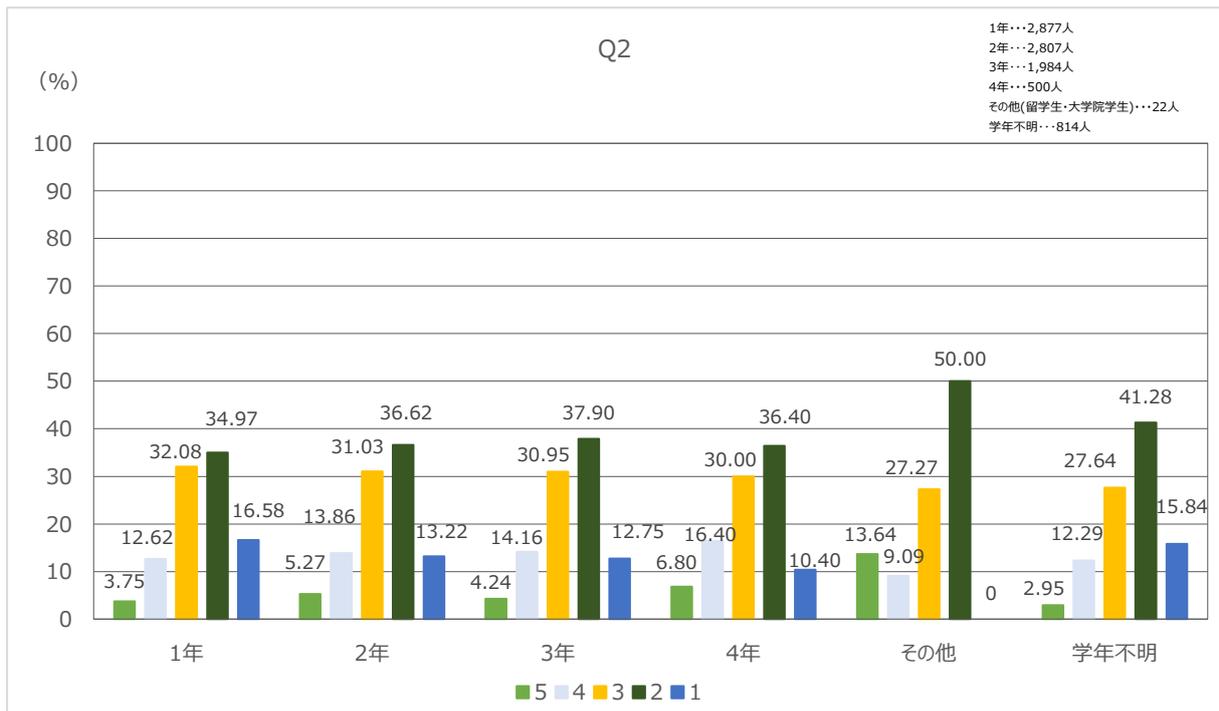
各設問に関して、学年別に評価得点の比率を比較した。全体に学年間で大きな差異はないが、2022年度と同様、授業への満足感に関する諸指標は「1年次」においてやや低く、学年進行に伴って改善していく様子が認められる。基礎課程でのカリキュラムや教育活動のあり方について、改めて検証してみる必要がある。また、授業への出席率については就職活動の影響からか、4年生において出席率が低い学生が多めであった。

以降、各設問の順に、学年別の結果を図示する。尚、評価実施の初期段階でフォームに不備があり、以降、814人分の回答を「学年不明」として集計を行っている。



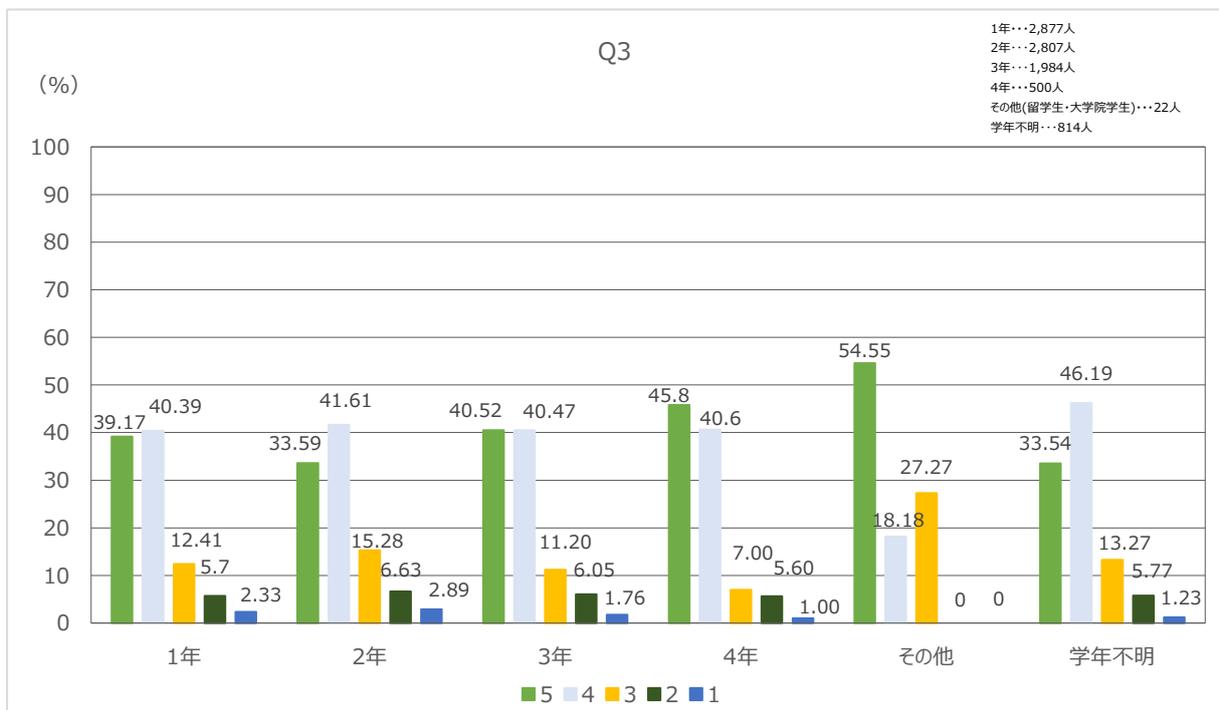
Q1. この授業への出席率はどのくらいでしたか。

5. すべて出席した 4. 1~2度欠席したがほとんど出席した 3. 3分の2程度出席した
2. 3分の1程度出席した 1. ほとんど出席しなかった



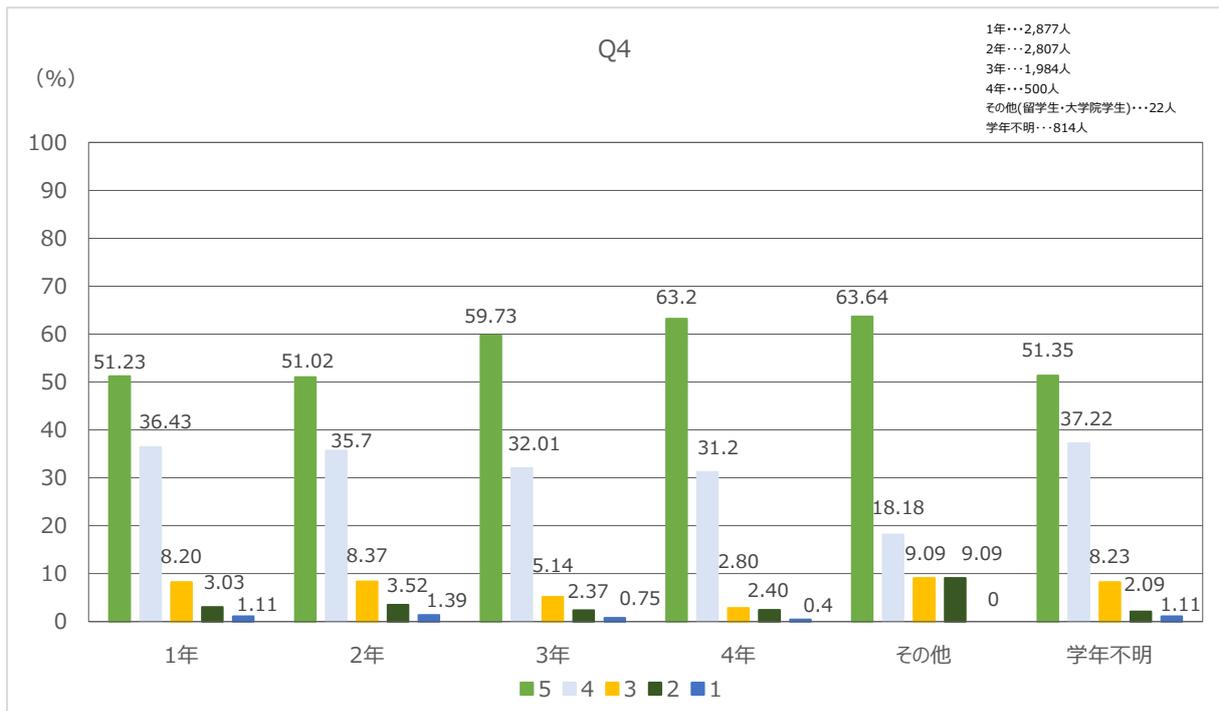
Q2. この授業のために平均何時間程度、予習・復習をしましたか。(本やインターネットで調べるなども含む)

5. 週2時間以上 4. 週1～2時間 3. 週30分～1時間 2. 週30分以下
1. 週0分



Q3. 受講前からこの授業の内容に興味・関心があった。

5. よくあてはまる 4. ある程度あてはまる 3. どちらともいえない
2. あまりあてはまらない 1. まったくあてはまらない



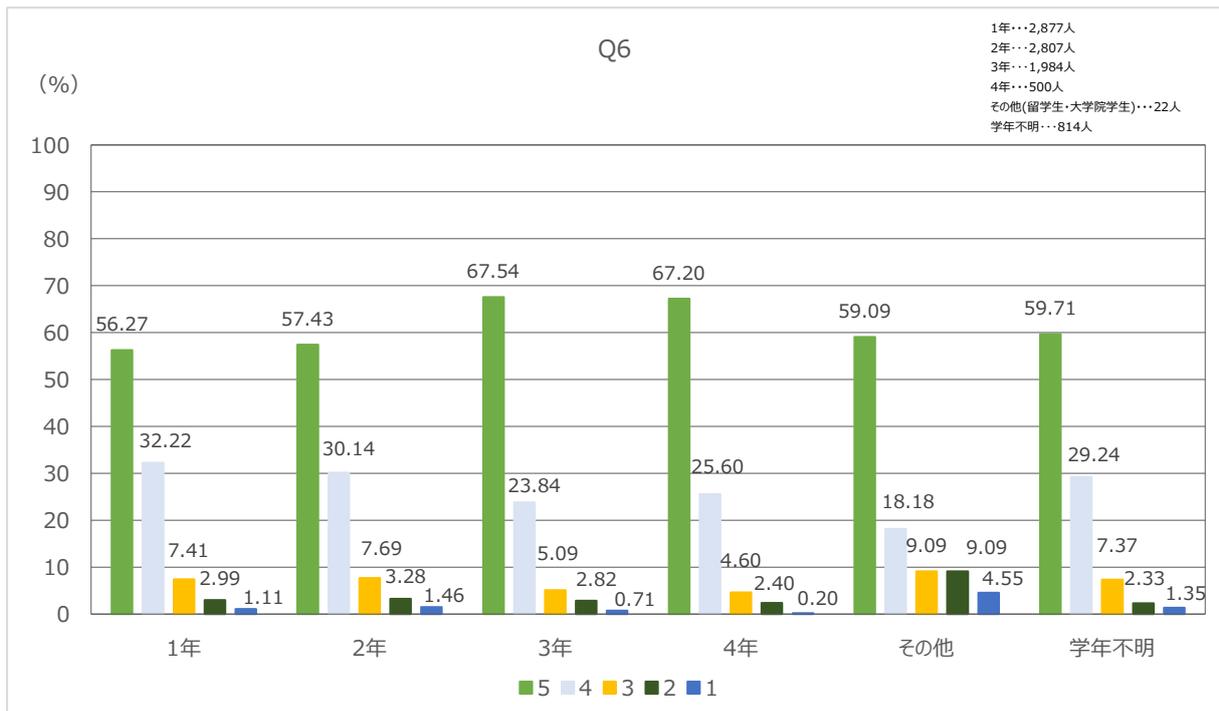
Q4. 総合的にみて、この授業に満足した。

5. よくあてはまる 4. ある程度あてはまる 3. どちらともいえない
2. あまりあてはまらない 1. まったくあてはまらない



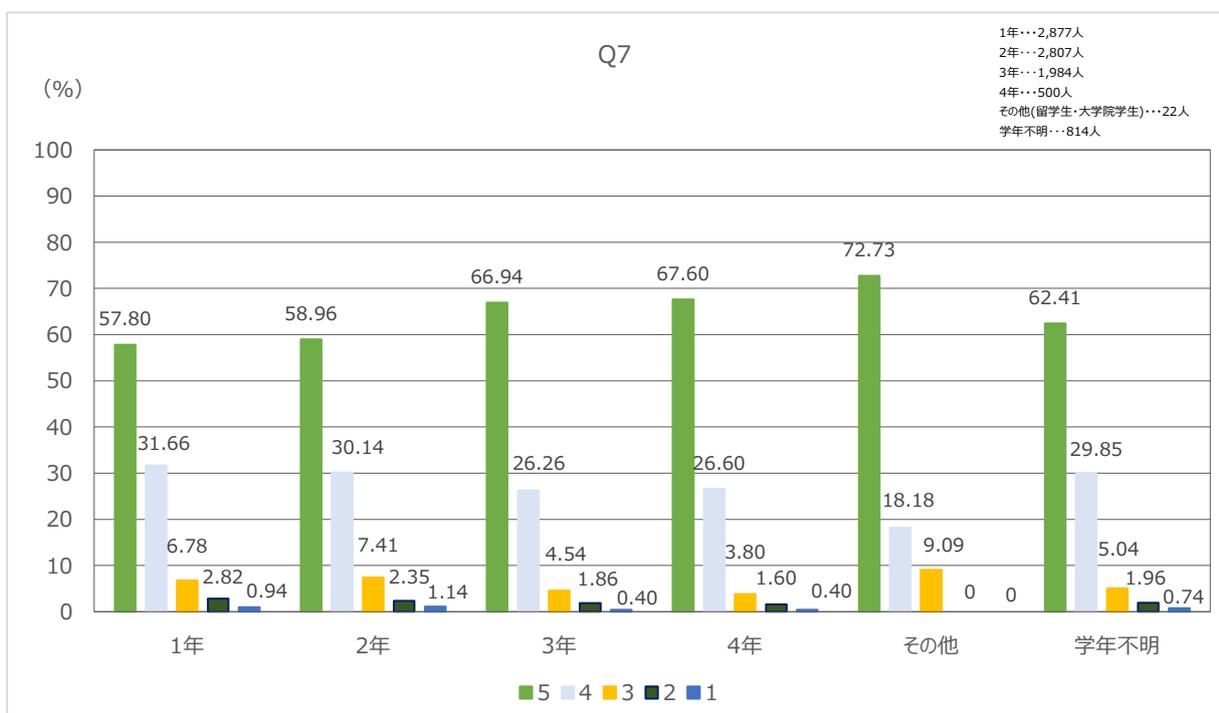
Q5. シラバスの記載内容は、この授業を受講するうえで役に立った。

5. よくあてはまい 4. ある程度あてはまる 3. どちらともいえない
2. あまりあてはまらない 1. まったくあてはまらない



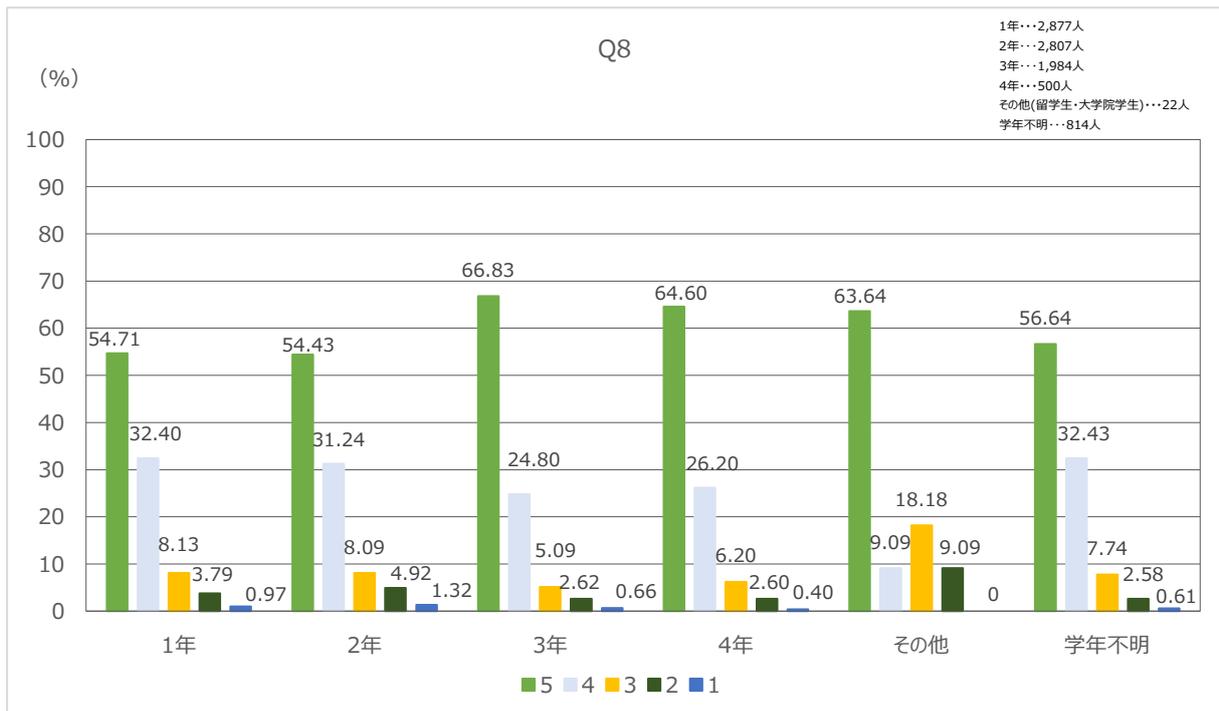
Q6. 教員の説明の仕方、話し方はわかりやすかった。

5. よくあてはまる 4. ある程度あてはまる 3. どちらともいえない
2. あまりあてはまらない 1. まったくあてはまらない



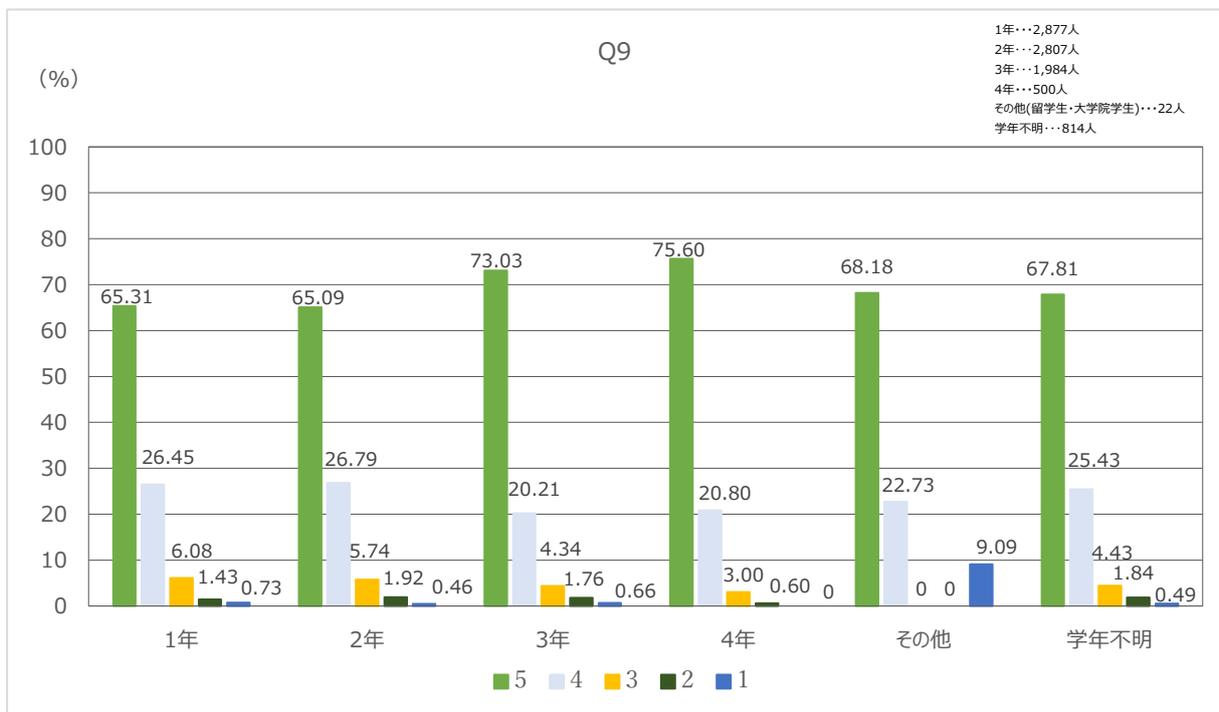
Q7. 授業中に使う教材（テキスト・配布資料・映像など）は学習の役に立った。

5. よくあてはまる 4. ある程度あてはまる 3. どちらともいえない
2. あまりあてはまらない 1. まったくあてはまらない



Q8. 毎回の授業内容の分量や速度は適切だった。

5. よくあてはまる 4. ある程度あてはまる 3. どちらともいえない
2. あまりあてはまらない 1. まったくあてはまらない



Q9. 教員の授業運営（質問や発言の十分な機会、私語の注意など）は適切かつ公正だった。

5. よくあてはまる 4. ある程度あてはまる 3. どちらともいえない
2. あまりあてはまらない 1. まったくあてはまらない

第2章 専任教員による授業報告書

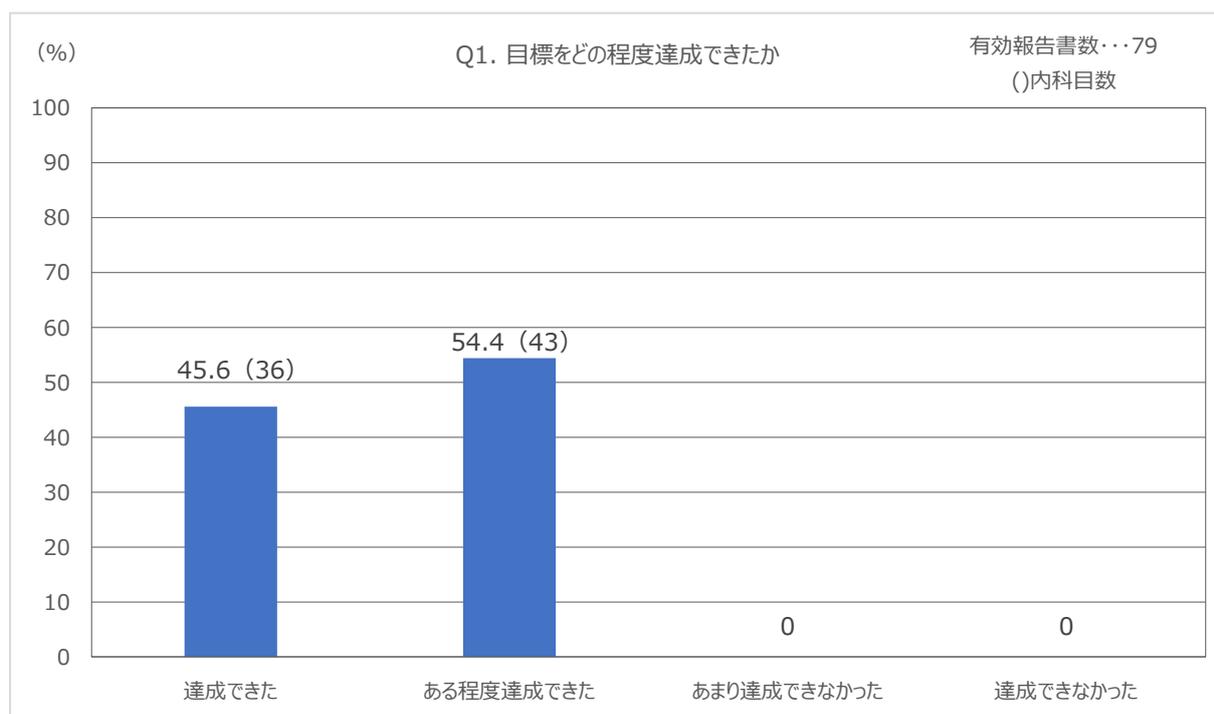
学生の授業評価結果を受け、授業担当教員は下記の点について、自らの授業を振り返るとともに大学に対する提案を行うことで授業改善を図っている（巻末の報告用フォーム参照）。報告書の提出については2科目以上実施科目がある場合は、1科目の提出でも構わないことになっている。尚、本年度の報告書提出数は79科目であった。以降、専任教員の全体の傾向を見ていきたい。

- ・ 授業目標の達成度認知
- ・ 授業の目標を達成する上で効果的な方法や工夫
- ・ 教室設備について（問題点等）
- ・ 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について
- ・ 学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について
- ・ 学科や大学全体として取り組むべきこと
- ・ 授業評価に関する意見、提言
- ・ その他

1. 授業報告のまとめ

（1）授業の目標達成度

専任教員に授業達成度を尋ねたところ、授業の半数弱で「達成できた」、残りの半数強で「ある程度達成できた」と回答されている。専任教員の認識としては一部に課題を残しながらも、授業は概ね目標を達成できたと考えられている。2022年度からの変化は認められなかった。



(2) 目標を達成する上で効果的だった方法や工夫

目標を達成する上で効果的だった工夫・方法としては「レジュメなどの配付資料」が68%と最も多く、「パワーポイント」が63%で続いている。さらに、「学内システム (Sophie・Google Drive)」が46%、「文献などの資料、史料」が43%と多い。

2022年度と比べると大きく減少が見られる項目も目立つ。「学内システム (Sophie・Google Drive)」が61%から46%へ、「視聴覚教材」が55%から40%へ、「プレゼンテーション」が44%から25%と低下の幅が大きい。また、「授業内での課題」も51%から39%へと減少している。コロナ禍から本格的脱却し、オンラインから伝統的な対面形式の授業に移行したことが原因と考えられるが、コロナ過で獲得したオンライン・スキルの活用が一時的なものとならないよう、何ら促進方策も検討する必要があると考えられる。

尚、18%の授業で「その他」として何らかの方策があげられた。具体的には以下の内容になる。件数としては少ないものの、今後、教員が効果的な教育方法を新たに導入する上で有用な情報が含まれている。

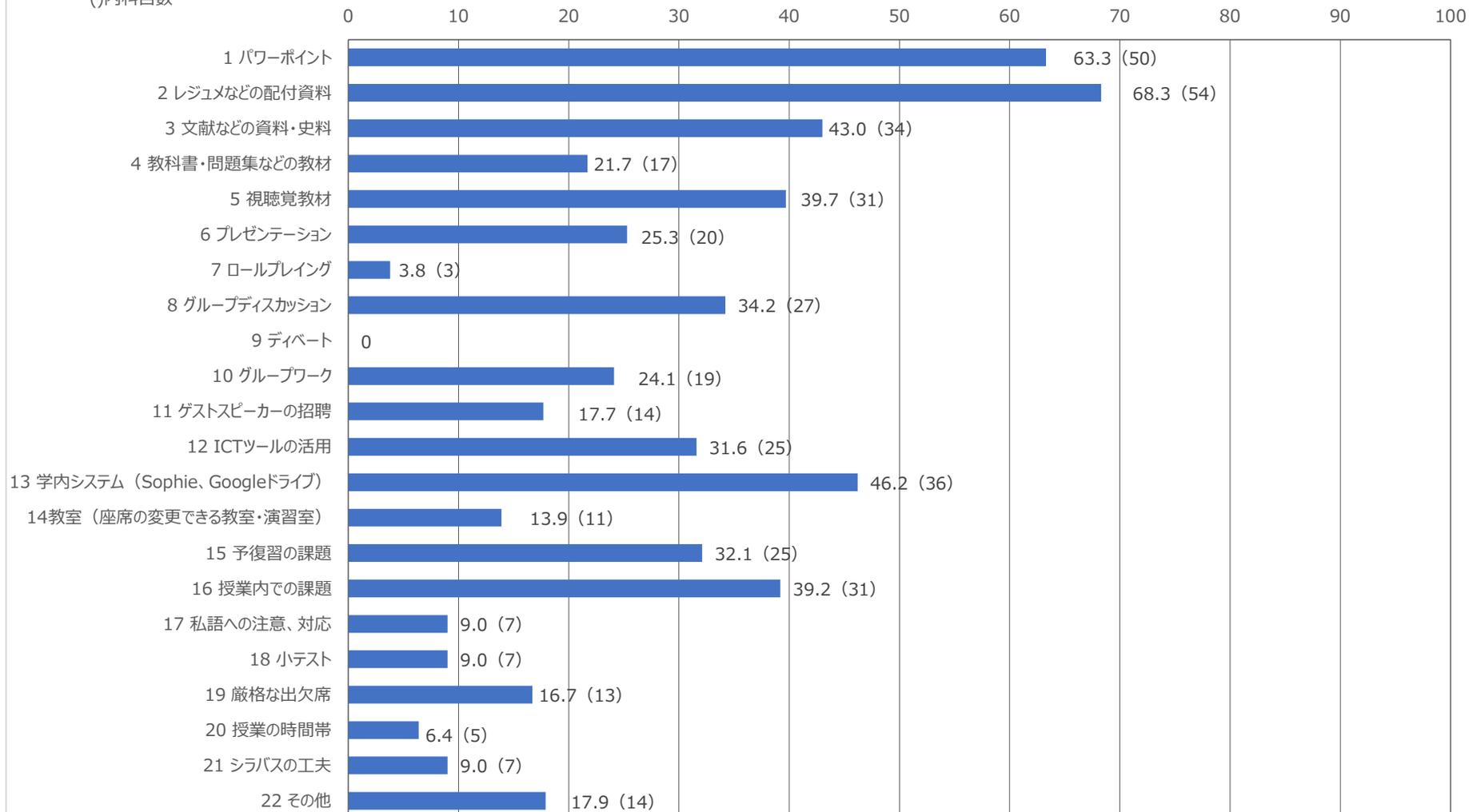
- ・ Online office hours
- ・ 授業中の10分間の休憩
- ・ 毎回出席確認と質問のメールを授業後に教員宛に送らせ、それに回答する。
- ・ 発表担当学生に対する ①事前指導 ②リマインダーメールの送付
- ・ 板書
- ・ 短めの面談を頻繁に実施
- ・ 卒論のための調査
- ・ ペアワーク 読み合わせ
- ・ リアクションペーパーを各学生の許諾を得た上で教室内で匿名で公開。
- ・ TAの活用
- ・ 自主的な研究テーマの設定と調査・考察
- ・ 個別に実施した生涯学習施設調査とそのミニレポートの提出
- ・ 外部講師を招いてのワークショップ
- ・ pair share/ジグソーというアクティブラーニングの手法を使って、講義内容を自分で改めてプレゼンする活動を毎回行った

有効報告書数・・・79

Q2. 目標を達成する上で効果的だった方法や工夫について (複数回答可)

(%)

()内科目数



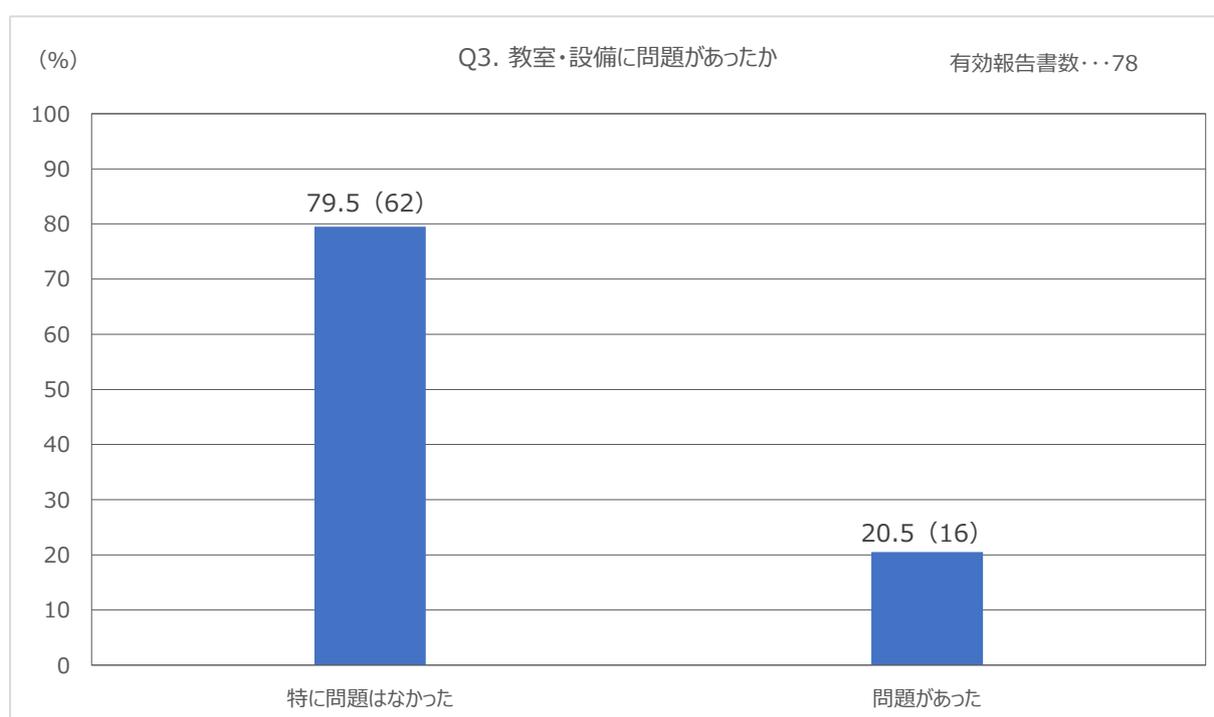
(3) 各教員からのコメント

教室設備について（問題点等）、教員個人が取り組むべきこと、学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について、学科や大学全体として取り組むべきこと、授業評価に関する意見、提言、その他の各項目については自由記述形式で回答を求めた。

以降はこれらの項目ごとに、各報告をまとめている。教員名、授業名は伏せているが、原則、プライベートな情報以外は原文のままを掲載している。

1) 教室設備の問題

8割の授業で教室・設備に「特に問題はなかった」と回答されているが、「問題があった」との回答も2割あった。具体的な内容を以下の表にまとめた。



※1名回答がなかったため、有効報告数 78 となっている。

Q3. 教室設備（空調・ICT 機器・マイクなど）や通信環境の問題について	
331 教室	天井スピーカーから学内のどこかの声が聞こえることが数回あった。こちらでは HDMI で教室のパソコンをスクリーンに投影することしかしておらず、マイクの使用や映像投影はしていない状態だったが、他の授業や作業中の声が聞こえることがあった。この教室に限らず、342、343 でも同様の現象が起きていた。
教室不明	備え付けの PC に有線マウスを接続すると（学生の研究発表に必要だったため）、しばらく問題ないが、やがてカーソルが動かなくなるトラブルが頻発した。
教室不明	Wi-Fi がひどいときは、まったくつながりませんでした。学生のアンケートにも書いています。
203 教室	4 限の授業だったが、ワイヤレスマイクの充電が切れていることがあり、使えないことが 3 回に 1 回程度あった。
4 号館 3 階 人関 PC 室	冷房が効きにくかった
4 号館 4 階人間関係ゼミ室・ 大槻研究室	WI-FI がつながりにくい。
403 教室 405 教室	受講者の数に対して、教室が狭すぎる。また黒板が小さすぎる。
教室不明	マイクの反響が少し気になったという履修生のコメントが 1 件あった。
4 号館 4-1 教室	① 1 本しかない有線マイクの故障（2 週間後に修理されました）、② ワイヤレスマイクの設置を希望します（マイクは 2 本以上必要だと思います）、③ 設置されている小さなテレビ画面（ディスプレイ）ではパワーポイント等の資料や映像資料が見えないので、スクリーン設置を希望します。
311 教室	スピーカーの位置のせいなのか、原因はわからないのですが、マイクの音量が教室の前方と後方で差があり、調整にたいへん苦慮しました。前方にとってちょうどよいと後方では小さく、後方にとってちょうどよいと前方では大きいという状況でした。学生に説明し、理解してもらったうえで、授業を進めましたが、自分の声が小さいせいもあり、学生に迷惑をかけてしまった部分があります。
311 教室	マイクの音声の後方には届かないときがあり、受講生に迷惑をかけてしまった。
教室不明	Mac によるスライドがカーソルが現れないなど、時折、授業運営に支障があった。

Q3. 教室設備（空調・ICT 機器・マイクなど）や通信環境の問題について	
25 番教室	プロジェクタ投影のための HDMI コードの接触が悪かったり、壊れていたこともあったため、投影できるまでに時間がかかった。履修者数 78 人に対して、教室は手狭な感じがした。
334 教室	ハンドマイクの電池が劣化していて受電していても 30 分ほどで切れてしまう。HDMI コードの接触が悪く、PPT の投影に手間取ることがあった。
教室不明	設置のプロジェクターは 20 年以上が経過していて、持ち運び型を毎回使用しているが、小さなスピーカーしか用意されておらず、聞こえない学生が出る。
3 号館 (シラバスに記載がないのでわかりません)	教室にあるモニターが古すぎて使えずに驚いた。

2) 教員個人が取り組むべきこと

各授業において、効果的な授業や運営を行うため、教員個人が取り組むべきこととして下記の内容が報告された。

Q4. 授業内容、運用、カリキュラム編成などについて、特にご意見、ご提言などありましたら自由に記述してください。

教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について
学生同士のコミュニケーションを深めることが学ぶ良い雰囲気を作ることができると思うので、グループワークやディスカッションの機会を多く儲けた。
Even translating this, I'm not sure what you mean ("What individual faculty members should work on, effective teaching methods, and how to run their classes [it doesn't have to be about you]?")
少人数の授業では、一人一人の関心事や力に合わせた文献選びや授業の組み立てと並行して、一つのクラスとして全員で様々なトピックを学びながら、意見を述べたり疑問をぶつけあうなどして興味関心を広げられるようにすることや、グループの構成やサイズを変えた作業を多く取り入れ、主体的・積極的な学びと協働性に力を入れた。そのことから critical thinking や synthesis と言った学びの基本的スキルの向上は見られたが、その一方で学生同士でお互いの足を引っ張る（全体的にレベルが下がってしまう）こともあり、フィードバックの頻度や内容の工夫が必要だと感じられた。
学生の能力・意欲にかなりの格差があるので、できるだけ個別に対応する時間をとることが効果的
<ul style="list-style-type: none">・ 同一教員同一クラスで週2回実施の授業であるため、一人ひとりの学生の特徴を理解しやすく、きめ細かい指導に役立っている。・ 単に語学スキルを磨くだけでなく、とくにパラグラフ・ライティングやテキストの読解を通して、論理的思考や批判的思考などのアカデミック・スキルを指導する授業でもあるという位置付けを担当教員間で徹底したい。・ 1年英語は原則として All in English（全て英語）をルールとしている。今年は下のレベルを担当したため、英語に苦手意識をもつ学生達が多かったが、理解しやすい英語で説明をすることを心がけた。・ 板書は様々な方法を試したが、タブレットのノート機能をスクリーンに出すのが最も効果的であった。（黒板に書くと後ろに席の学生が見えず記録にも残らない。スライドは配布を求められ学生がノートテイキングをしない。）・ 毎回の授業後に Google Classroom に宿題やテストなどに関する情報を掲示した。（授業内に英語を使って口頭で伝えるだけでは聞き逃す可能性があるため。また、欠席した学生があとで宿題を確認することができるため。）
課題量を適切にすること。全面オンライン授業だった時以来、課題による負担が増えている。
卒論指導が中心の授業だが、英語のアカデミック・ライティングを書くための基本的スキルについて、3年次のゼミで指導する時間を確保するようにしたい。

<p>教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について</p>
<p>効果的だった授業方法：研究発表に対する質問・意見を、その場で口頭で言うだけでなく、授業後に GoogleClassroom の質問コーナーに投稿するよう、受講生全員に義務づけた。それらに対し、発表者が期限までに回答を投稿する。質疑応答のライブ感は薄くなるが、全員が参加できる。また、考えを整理して対話することにつながり、建設的なやりとり、議論の深まりが顕著に見られた。</p>
<p>自分の得意な内容を伝えるといつもすべるなあとと思っています。</p>
<p>学生同士で話し合える時間を入れていくべきでした。</p>
<p>毎回質問や感想を提出させ、Q&A を作成して配布した。誤解があればその都度指摘した。</p>
<p>板書を丁寧に書く</p>
<p>20 人という大所帯において「演習」を可能にする工夫。</p>
<p>通常の授業にも当てはまるが、各回で担当者が異なるオムニバス授業の場合は特に、授業で使用した資料（スライドなど）を Google Classroom 等にアップし、復習などの便を図るとよい。</p>
<p>授業内容に関連するミュージカルや映画を視聴する機会がありわかりやすかった、という意見がアンケート回答で多数出ていたので、今後も映像資料の使用は継続し、さらに充実させるよう努めたい。パワーポイントの内容が豊富なので、スライド 1 枚あたりの説明にもう少し時間をかけてほしい、あるいは共有してほしいという意見もあり、来年度以降検討したい。</p>
<p>効果的な授業方法として、大人数の授業（特に 400 番教室を使用するような授業）では座席指定にすることで私語を抑制することができました。</p>
<p>海外の事例を扱うことが多いですが、まず初めに日本の類似した事例を導入として紹介し、内容把握ができるようにしています。すべての学生に合わせるのは難しいですが、なるべく学生が扱うテーマを身近に感じてもらえるよう構成を考えています。</p>
<p>学生の日常的な話題にも関心を持つようにする（自戒を込めてです）。授業の途中で振り返りの時間を設けること。</p>
<p>最初に導入の講義を行い、そのうえでディスカッション、そしてその内容の解説、解説を聞いたうえでの振り返り（リアクションペーパーの課題）をしましたが、その方が振り返りの内容が深まっていた印象を持ちました。</p>
<p>履修人数が多い一方、教室の座席が足らず、授業運営に大変苦勞した授業でした。授業の内容もさることながら、学生たちの学習環境を整えることも学習の効果として大きいと実感した授業でした。</p>
<p>学生が主体的に考えるようなしくみをつくる。</p>

教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について

- ・ 2～4年生がミックスした44人を8つのグループに分け、4人の在日外国人を対象としたインタビューを実施した。
- ・ 「大人」の外国人にインタビューするということで、準備段階から緊張感が生まれ、皆が真剣に準備したのは良かった。
- ・ 大人の外国人は、授業外の学生とのメールのやりとりも綿密に対応してくれ、インタビューを楽しんでくれた方もおり、（学生が情報を入手するだけ、という一方的な関係ではなく）両者にとって良い相乗効果が生まれた。それは、授業後に頂戴したメールの文面から分かり、学生にも伝えた。
- ・ ただ4人の在日外国人のうち、日本語能力の低い方が1人混ざっていた。教員が通訳として張り付く体制を取ろうとした途端、学生が英語でインタビューを開始し、周辺学生への通訳も始めた。臨機応変な学生の対応と、能力の高さに驚いたが、インタビューで使用する言語について日本語と決めず、学生に選ばせることも可能かもしれないと気づいた。
- ・ 教員の指示が（早口のあまり）聞き取れず、パニックを起こしそうになった学生が1人いた。同学生はゲストを1階で出迎え、所定の場所にアテンドする役であった。重要な役まわりは複数で担当させ、教員の指示も丁寧におこなう必要があると、改めて感じた。

十分な準備を行うこと。

授業内容のカスタマイズ。特に最近の事例を取り上げることで、学生の関心を高める工夫が必要。受講者数が多く個別的にコミュニケーションを取れる環境ではないことからオンラインでの開講も可能。チャット等を活用した質問の投げかけなども容易であることから、今後、積極的なオンラインの活用を検討してもよい。

学生には、何を考えているのかを文章の上で明晰に発信する力を向上させるため、根気強く問いかけながら本人の言葉を引き出すこと。
しばしば、知識不足のため思考や議論が発展しない場合が見られる。そんなとき教員は、読むべき文献や調べてみるとよい著者、訪ねるべき資料館、ウェブサイトなどをヒントとして提示して、導くこと。

他クラスの進度確認をこまめに行なう。非常勤講師の先生方に積極的に問題のある学生について尋ねる。再履修者で問題のある学生は、早めに所属学科の先生に連絡する。

予習とその理解度確認、その内容の授業での共有、リアクションペーパーによる講義内容の理解状況の確認

マクロ経済学は社会科学の基礎科目なので、学問水準を落とさず、現実に対応した分かりやすい授業を心掛けたい。講義を聞いた後に具体的な課題を毎回の宿題で解くことで授業の理解が確実になるという工夫をしている。これを「楽しい」「ためになる」と捉える学生と、「負担である」と思う学生とが両極化しつつあるかもしれない。が、致し方ないのかもしれない。

<p>教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について</p>
<p>教員は、外国語学習における ICT ツールの活用と生成 AI の適切な使用を指導し、学生の言語習得を支援すべきです。スピーキングの機会を増やすことも重要です。</p>
<p>現場のある学問分野の場合、講義が「机上の空論」ではないことを学生に理解させるための「現場」との接点の確保</p>
<p>パワーポイントなどで視覚的な授業資料を作成することは①学生の理解促進、②集中力の維持、③復習のしやすさ、のために有効であると思います。個人的には、予習の仕組み（何をどのように取り組ませ、授業での理解に生かすか）を構築することが課題であると思います。</p>
<p>講義形式ではありますが、常に学生の意見や反応を確認しながら授業を進めること、そしてパワーポイントのスライドにイラストやアニメーションを配置して（やや難解な説明を）視覚的に伝わるように工夫することは有効だと思います。</p>
<p>受講者には、授業前にテキスト読解のコメントを提出してもらっている。データは記名の状態で受講者間で共有する約束とし、注目すべき見解や議論の焦点になりそうな箇所に、教員がマークをつける（誤字や不適当な言い回しなどは訂正する）などしたうえで、授業前に一覧にし、Google クラウド上で共有している。</p>
<p>授業資料について、論理的構造を一層明確にし、学生の理解を促進することができるよう、さらなる改良を行う。</p>
<p>学生へのアンケート調査の結果では、「総合的にみて、この授業に満足した」との問いに「よくあてはまる」「ある程度あてはまる」と回答したのは 95%であった。授業資料や授業内容の分量・速度についても肯定的な回答が多く、授業計画は概ね適切だったと考える。</p> <p>但し、「この授業のために平均何時間程度予習・復習をしましたか」との問いに対して「週 30 分以下」との回答が 38%、「週 0 分」との回答が 24%であった。知識の定着を図るため、事前事後の自覚的な学習時間を増やすことができるよう、授業の内容について更なる改善を行う。</p>
<p>授業の内容・進度等に問題はなかったものの、当初企図していたグループディスカッションを十分に行うことができなかった。そのため、「この授業のために平均何時間程度、予習・復習をしましたか」という問いに「週 1-2 時間」との回答が 33%である一方、「週 30 分以下」との回答も 33%に上った。学生の自発的な予習・復習を促す仕組みづくりが必要と考える。</p>
<p>教科書とは別に、独自の授業用教材を作成しており、その効果の検証と改善を図る。</p>
<p>独自教材を作成の上、ラテン語原典の購読の授業を実施した。教材の内容について、難度の確認と学習効果の検証を進めた上で、改善を図る。また、受講者数が少ないため、受講者数を増やすための取り組みを進めたい。</p>

教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について

授業では主に文献講読を行ったが、学生の知識や理解力を考慮し、一回に読むべき分量や、テキストの説明にかける時間などを十分に検討する必要がある。学生に対しては、それぞれの取り組みが授業の内容に反映し、全体としての学びに繋がることを意識してもらうことが重要である。またあわせて、個々の取り組みや問題意識に対して、授業内で真剣に向きあうことも必要である。

授業内容、授業方法、評価基準等の授業に関する最初の共通理解を大切にしつつ、受講生とコミュニケーションをとりながら授業を構築したいと思います。

学生たちが授業の中で、他の人の意見や考え方をよく聞き、それを自分の中で理解して、さらに自分の意見を発表できる機会を多く取ることで、一方通行的な情報の受け止め方ではなく、物事の本質に気づいたり、学びを深めたり、興味関心を広げることが可能となると思われ、その点を意識した授業を展開した。

毎回、グーグルフォームで提出してもらったリアクション・ペーパーをスプレッドシートからエクセルファイルに整え直して（表にする、個人名を隠す、重要箇所に線を引く、色付けするなど）、受講者全員宛に共有していた。また、次の回の最初でも丁寧な共有の時間を作った。その際に寄せられた質問にも回答していた。同じ授業を受講している他者の視点を意識することは、学生たちにとって刺激になるようである。映像資料があれば用いると、イメージや視覚的にも理解が進みやすい。

この授業では、パワーポイントによる内容の提示、最新のデータ資料の提示、ビデオ視聴、実際に小学校において使用されている検定教科書の利用、学校で行われた授業の様子のビデオ紹介、ロールプレイングによる体験活動、グループワーク・ディスカッションなど多様な教育方法の工夫をしている。なかでも学校で行われた授業の様子を手元資料（指導案）と見比べながら検討し、またそのことをグループでディスカッションするといった、実践的な方法が特に効果的であったと思われる。

履修生が81名という大教室の授業であったが、「問い」を中軸に据えて進めることによって全体的に集中力の高い授業であったと思われる。

情報提供をしたのち、それに関連した演習課題を設定してグループワークを行なって、グループ発表に繋げた。これによって、「知識に基づいて考える→意見交換する→考えをまとめて発表する」という学修の道筋が受講生にとっても明確になった。

常に知識・スキルをアップデートし、学生の実態を把握すること。

履修者80人近くの講義では、個々人へのフィードバックが難しいが、リアクションペーパーを手書きで提出してもらい、翌週にそれに関するコメントを口頭で返すことでコミュニケーションを図ることができる。

教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について

卒業研究は個人で行うが、分析などは全員で授業の中で教えるか、学生がお互いに学び合えるような指導が必要だと思う。

卒業論文に取り組む前の3年生が、学習というテーマについて体験ベースで考えてもらうことに重点を置いて、外部講師を招いたワークショップを行い、自分たちでも学びの場を作るワークショップを行ってもらった。学生自身が自分の体験を振り返って、自分の今できる力を最大限に発揮して、ワークショップという「コト」作りに取り組んでくれた。学生たちの持っている力が自発的に発揮される姿を見ることができた。

本学での初めての心理学統計法の授業だったので、まずは本年度は過去のシラバスを参照しながらカリキュラムから外れない授業方法を検討した。授業スライドを作り込んで、視覚的な分かりやすさを重視し、それ自体への反応はよかった。しかし、数学や数式を使う部分において苦手な学生にとって十分な支援が難しかった。心理学統計法は文系の学生には難しい内容ではあるので、自分の手で複雑な計算ができるかどうかにとらわれずに、学生が内容を腑に落とせるようなアクティブラーニングを今後は取り入れたい。

講義自体は教科書を踏まえて行ったが、学生に自分で教科書を1冊説明できるようになることを目標にすると宣言して、それができる授業方法として pair share とジグソー法を取り入れた。pair share は教員からの講義内容を10分程度ペアになってお互いに説明し合う活動で、互いに説明の良さを評価してもらった。さらに、ジグソー法ではグループの中で担当する授業のテーマを選んで、毎回の講義で担当の学生が講義内容と + α で自分が調べてきた本や論文について付け加えた内容をプレゼンした。この内容はグループ内で評価してもらって、評価が高い人は授業期間の前半と後半で表彰して、教員からも良かった部分をフィードバックした。

聞くだけでなく、学生がプレゼンするなどの工夫が必要。

①②併せての回答です。

履修者が137名と大人数のため、講義形式とならざるを得ず、学生の理解度や反応を見るために、毎回アクションペーパーを提出してもらった。次の回で質問に回答するとともに、印象深い内容についてフィードバックをした。（ただ費やす時間や労力はかなり大きかったので、今後は人数制限をしたほうがよいかもしれない。）また、関心を持ってもらうため、視聴覚教材（心理臨床現場を取材したもの）を取り入れたたり、外部講師（家裁調査官、スクールカウンセラー）を招いてお仕事紹介をしていただいた。

教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について

本講義は心理学科教員がそれぞれ専門領域に話すものであり、本大学の心理学科の特色を伝えるとともに、心理学とは何かということや、心理学の魅力を伝えるものであると思われる。

感染症によってオンライン講義をよぎなくされた年度以降、オンラインで実施としている。以前は抽選を行っていたが、オンラインとすることで、より多くの1年生の受講が可能となった。心理学の入門として本学心理学科の教員全員の専門を多くの学生に伝えることができていると考えられる。

前回授業の復習を内容に含める。

3) 学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について

学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について、下記の内容が報告された。

学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について
こまめな feedback、教員と学生、学生同士の距離を縮める
I think giving the students support but also holding them accountable is a good way to conduct classes.
学生がプレゼンテーションを行う際、内容に基づきディスカッションクエストを作成。Google Classroom に discussion board を作り、そこに各学生が記入をすることでお互いの意見が見える。プレゼンテーションをした学生は、翌週の授業でサマリーや印象に残った意見などについて簡単に発表し、教員は個々の意見と全体の意見に対してコメントをする、ということを1つのサイクルで行った。内容への理解が深まるだけでなく、応用的なディスカッションクエストを考えることで、実生活と結び付けた考察ができた。
プログラミングの学習は成否の白黒がはっきり出るので、否の結果が出た時に自分でトラブルシューティングしてミスの原因を自覚する力を付けることが重要。
(1) 授業内の課題では、必ずペアワークをさせている。友達と確認することで理解が深まったり、一人だと不安だが一緒に確認したあとだと積極的に発言できたりしたようだ。(2) 授業内の課題によって、教員が指名して発言を求めるときと、自発的な発言を求めるとのバランスに気がつけた。全員に発言の機会を確保するためには指名も時には必要であった。自発的に発言する学生は、最初はメンバーが決まっていたが、学期末に近づくにつれ自ら手をあげる学生が増えたことは教員としても嬉しいことであった。(3) 週2回の1年英語は1年次生にとっては、友人づくりの大切な場でもある。席替えを数回行ったり、様々な speaking activity を取り入れたりしながら、多くのクラスメートとコミュニケーションがとれるように工夫をした。
授業資料は、プリントで配布していても、同時に Web で共有する方が学生にとっては安心感がある。
教員があらかじめ資料を作成・配布し、映像教材の考察を深める工夫を行った。ディスカッションを円滑に進めることで、学生の積極的な取り組みを促すことができた。
今年度は、冬休み中に他の学生の卒業論文を3本読み、書いた人に Classroom でコメントを送るという活動を取り入れた。書いた本人にとっては「読者」を得た手応えが得られ、教師にとっても学生同士のやりとりは教室ではわからない学生の一面を垣間見ることができて学びとなった。卒業論文を書くプロセスは、個別の孤独な作業となりがちなので、卒論を書く途上においても学生同士で原稿を交換して読み合い、助言をし合う活動を入れるとよいと感じた。
Google フォームを利用して授業内課題を課し、その場でクラス全体の回答を共有しフィードバックする取り組みは、特に学生の反応もよく、刺激になったと思われます。

学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について
①に記載した投稿式の質疑応答。受講生の質問力・回答力が向上し、演習への積極的な取り組みにつながった。
そもそもが資格関係の授業なので、学生の意識は高いです。なぜこういうことを勉強する必要があるのかがわかりやすい内容だったと思います。つまり授業内容が日本語教師という仕事につながることを意識してもらうように心がけました。
講義式であるが受身にならないように、授業中に課題を出し、ペア〜グループで意見交換する活動を毎回行った。
学生同士のグループディスカッション
院生にとって必要かつ具体的な目標を掲げ、それを中心とした内容にすること。
ノートを取らせる
可能であれば円卓形態で演習できるよう設備を工夫していただきたい。
授業内でグループディスカッションなど、意見交換をする機会をもうけるとよいのではないかと。
今回の授業では、空欄穴埋め式の復習用プリントを用意して授業内容の復習に役立ててもらい、次の回の授業で答え合わせを行った。ゲストスピーカーによる講演の前に質問したいことを書いて提出してもらい、終了後にも感想を書いて提出してもらったが、全員が積極的に取り組んでおり効果的だった。
ゼミにおいて、心理的安全性を高めることを意識し、学生が意見・質問をしやすい雰囲気や意見・質問することへの慣れを向上させることを徹底しました。それにより、ゼミがチームとして上手く機能し、積極的に卒業研究に取り組む学生が増えたように思います。このようなディベートやグループディスカッションを中心とする授業では、そうした雰囲気の醸成が有用だと思います（ただし、少人数のグループでなければ難しいと思います）。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 異文化理解をわかりやすく捉える効果的な方法は「遠くの人」を見つめる事であり、今回、学生がインタビューしたのは、エチオピア人、セネガル人、ケニア人、ガーナ人のアフリカ大陸出身の4名だった。 ・ 適当な方を探すのに大変苦労したが、多くの学生にとっては「生まれて初めて出会うアフリカ人」であり、学びのインパクトが大きく効果的だったと思う。
あえて意見が分かれそうな選択肢を作り、学生自身になぜそう考えたのか少し考えてもらい、グループ内でその後意見交換をしてもらった。その結果、多角的な見方ができたと話す学生が多かった。
大人数の授業だと難しいですが、グループワークを行う。

学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について
履修生は毎回 40 名少しと少人数だったからという可能性もありますが、ディスカッションの時間はどの学生も積極的に発言し、多様な意見に触れることを楽しんでいるような印象を持ちました。グループワークやディスカッションは学生を授業に積極的に取り組ませるために効果的だと思います。
学生が自分で重要な決定を行う。
課題に取り組む時間を設ける。5分から10分程度の休憩時間を確保すること。課題のフォームに自由記述欄を設けて、授業中に気づいたことを自由に報告できるようにしている（部屋が暑い、私語が気になるなど）。
授業の冒頭で課題への学生の回答の概要を紹介し、多様な意見の存在とそれぞれの背景として考えられる学術的知見を伝えている。また、卒論等に関する調査への協力を得ているが、これによって社会心理学の研究方法への理解がうながされる。
教員と一対一ではなく、集団でもなく、二人ペアになって問答をするフェーズも入れると効果的であると見られる
小さくてもよいので小テストや課題を毎回出す。授業後、教科書、ノート、辞書をロッカーに放り込まずに、家に持って帰って自習する仕組みを作り出す。
予習による反転授業と、それに基づく検討内容のシェアと、講義内容による補足、視聴覚教材による理解の促進
各回の冒頭で、前の回の内容を復習し、授業内容のつながりが見えるようにすることは、想定以上に効果的だった。
<p>授業で学んだ理論や内容で理解可能な新聞報道やテレビ報道を読み、学生同志でディスカッションを行うことで、自分の理解を確認したり、自分の意見を発信できたことに快感を覚えたり、他者の意見に刺激され奮起したりするなどの現象が観察された。</p> <p>また学生のリアクションペーパーを GoogleClassroom を通じて匿名で教室内で閲覧した（GForms で各学生の許諾を取った後に開示する。開示を拒否した学生のものには開示しない）。教員からのコメントや質問への回答を履修者全員が読むことができる。学ぶべき基礎が多い講義科目で、学期も中盤にさしかかると、学生の質問や学生の独自調査への正のフィードバックをする時間が授業内で取りにくくなるが、このかたちで教員と学生の双方向性を担保でき、学生同士の横方向への連携も確保できる。「同じものを聞いて理解やコメントが自分とはこんなに違うのかと刺激を受けている」「楽しい」という感想を耳にすることが多い。</p>
ゲストスピーカーによるリアルな声

学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について
①授業（内容）の本題に導くための「キャッチ」「切り口」「（学ぶ上での）マインドセット」の説明を工夫する、②わかりやすさのためには具体例を挙げなければならないが、わかりやすさから入ってただ表層的な理解で終わることがないように、理論的な説明や歴史的な背景説明を加える。
この授業に関しては、①家族に関する社会問題や法的課題を「自分事」に引き寄せて考えることができるように切り口を工夫すること、②ニュースやデータを活用すること、③海外の事象（家族法の改正など）を織り込むことがポイントになると考えています。
毎回、授業前日までに、予習としてテキスト読解後のコメントを Google フォームで提出してもらい、それも成績評価の対象としている。 またこの演習ではテーマを定め、そのテーマにまつわる思想家・宗教者・作家等の文章を毎回、ほぼ読み切りで用意・使用した。このことにより、初期の授業内容を理解できなかったために、議論に乗り遅れて途中で脱落するというケースはなかったように思われる。
古代末期のローマ帝国におけるキリスト教の在り方を共感をもって理解できるよう、周辺知識として、時代背景や地理的・文化的状況について図や写真資料を用いながら、丁寧な説明を心掛けた。
宗教を学術的に考察するということの意義や手法についての理解を促進する為、学生にとって身近な話題から、学術的な問題へと展開していく手法を用いた。また、学問的研究手法に焦点をあてる為、敢えて時事的な問題は扱わないように努めた。
テキストの講読にあたって、学術的背景や学術史、専門用語の解説に時間を割き、学生が全体的な見取り図を描きながら問題を考察することができるよう工夫した。
興味をもって学習を進めることができるよう、文法事項について、身近な例を挙げながら具体的に説明するよう努めた。
碑文や絵画、格言等の内に残るラテン語テキストを紹介し、古典語としてのラテン語と現代文化のつながりを意識することができるよう工夫して教材作成を行った。
毎回の主たる発表者とともに、質問やコメントを担当する役割も決めることで、多くの学生に発言を促し、議論を活性化することができた。2年生から4年生までが参加している授業のため、学年ごとに役割を調整することは、特に下級生にとって参加しやすい環境を作るうえで重要と思われる。
ゲストスピーカーの招聘

学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について

SNS を活用した情報の収集や、文献や資料等の確認をしながら、自分の意見をまとめる取り組みを授業内で多く行うことで、情報の出典を確認するスキルや、文章や表、図から内容を読み取る技術が高まることで、さらに学習への意欲がアップする姿が確認できた。

1年次の授業ということもあったが、大学で学ぶ基本的なスキルを授業内で何度も行い、身につけることで、さらに授業に積極的に参加できると思われた。

毎回、グーグルフォームで提出してもらったリアクション・ペーパーをスプレッドシートからエクセルファイルに整え直して（表にする、個人名を隠す、重要箇所には線を引く、色付けするなど）、受講者全員宛に共有していた。また、次の回の最初でも丁寧な共有の時間を作った。その際に寄せられた質問にも回答していた。同じ授業を受講している他者の視点を意識することは、学生たちにとって刺激になるようである。映像資料があれば用いると、イメージや視覚的にも理解が進みやすい。

①でも述べたが、実際の現場での様子を紹介し、そこから課題を見つけ出し、さらにその課題を解決するといった過程を授業内で経験することは、特にこのような授業では効果的であると実感する。今後はこの過程を授業時間内だけではなく、予習・復習を通して、またその際に個人だけではなくグループで探究できるようにする必要がある。

具体的な子どもたちの姿や実践事例を基に、学生が個人で考えるだけでなく、グループで語り合い、さらにそれをクラス全体で共有する時間を、できる限り、毎回の授業内で設けるようにしていますが、そうした機会を保障していくことは、それぞれの学生が多様な考えに触れつつ、自らの考えを深めていくために有効だと感じております。また、そうした経験を重ねていくにつれ、自らの考えを発信することで、周囲の他の学生の考えを深めたり、新しい視点を提供できたという手応えも得ているようで、授業後半になると、より積極的にそれぞれの考えを発信する姿が見られるようになっていきます。

正答のない問いをもってグループディスカッションをすることは効果的であった。

「知識＝情報」提供に関連する課題を設定し、参考となる発展的参考資料を掲示（Google classroom の活用）、その後、Google document や Google slide を用いて授業時間外に受講生がグループワークを行なうようなプロセスの設定。

視聴覚教材を適宜取り入れ、小グループでディスカッションの機会を与えること。

学生の興味・関心を把握した上で、熱心に取り組むことのできる課題を設定する。

学問として心理学に興味を持ってもらうように、身近な出来事に関係する内容を取り入れていくこと。

学生自身が活動したり、チームで議論したりするという授業は効果的だったと思う。3年生になり基礎的な力があるので、それを存分に活かした学びができたと思う。

学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について

授業の途中で pair share という手法で、学生同士で講義内容を説明し合うというワークを行った。授業内容が多いので、毎回はできなかったが、学生からは理解が進んだと好評だった。

講義自体は教科書を踏まえて行ったが、学生に自分で教科書を1冊説明できるようになることを目標にすると宣言して、それができる授業方法として pair share とジグソー法を取り入れた。pair share は教員からの講義内容を10分程度ペアになってお互いに説明し合う活動で、互いに説明の良さを評価してもらった。さらに、ジグソー法ではグループの中で担当する授業のテーマを選んで、毎回の講義で担当の学生が講義内容と + α で自分が調べてきた本や論文について付け加えた内容をプレゼンした。この内容はグループ内で評価してもらって、評価が高い人は授業期間の前半と後半で表彰して、教員からも良かった部分をフィードバックした。

上述した方法は学生からも主体的に学べたという意見をもらえた。ただし、グループで行う授業になるので、途中で出席をやめる学生がいるとチーム全体の雰囲気に影響してしまうこともあるように感じた。また、2年～4年まで様々な学年の学生がいたため、多様な学習段階の学生の交流を盛んにさせるような取り組みがあってもよかった。

心理学科の石黒先生の「感情・人格心理学」の授業方法を学生に聞いて、とても効果的だと思った。

授業毎に前回のリアクション課題の意見や質問にフィードバックすることで、学生たちの関心の高いテーマを取り上げることが出来、課題への取り組みがよくなったと感じています。

本講義では300名程度の学生が受講しているが、必ず課題を出し、そのフィードバックも講義内で行っている教員が多いため、双方向性の講義が可能となっていると考える。

グループディスカッションを取り入れる。ドキュメンタリー番組を視聴する。

学生が興味を持てる素材や方法を選ぶことに尽きると思うが、それでも知的好奇心を喚起されないような学生についてはどうしたらよいかと思う。

4) 学科や大学全体として取り組むべきことについて

学科や大学全体として取り組むべきことについて、以下のような提言があった。

学科や大学全体として取り組むべきことについて
We might want to rethink the classes we are offering to better help prepare students for the future. I think we also need to work on our study abroad program.
基礎課程の学生も受講するクラスだが、学科の2年生の受講態度や能力が目立って低く、英文科のイメージ低下が懸念される。
(1年英語プログラムのコーディネータとして) • 1年英語は1年次指定の全学共通・必修科目である(全21クラス)。同一科目複数クラスであるため、成績評価や課題の分量などに関して、クラス間の公平性の確保が課題である。 • 1年英語を担当する非常勤講師との情報共有が不可欠である。(毎朝、講師控え室にて1年英語を担当する非常勤講師と積極的にコミュニケーションをとることを心がけている。) • 1年英語は週2回×1限の授業であり、大学生活にうまく適応できない1年次生が顕在化する場でもある。また、英語に苦手意識をもつ学生も年々増えている。教務課、MCAL、学生相談室など学内関連部署との連携の重要性が増していると感じる。
100人以上の授業に対して適正規模の教室が非常に少ない。今は試験時も一人おきに座らせることができず、不適切である。改善が期待される。
学生の多様化への対応として、卒業論文につながる1-3年のカリキュラムをさらに充実させることが大事だと改めて感じている。近年の学生の変化を見ると、アカデミック・ライティングについてのカリキュラムの一層の充実とともに、好奇心・自主性を培う教育について検討を始める必要がある。卒業論文を書くことを通して成長する学生たちの姿を見ることは喜びだが、個別指導に必要な時間が過重負担となりがちであることについても改善の検討が必要。
この授業のことではありませんが、204教室など黒板灯が独立していない教室があります。学生からは、スライドを使用する際、電気をつけたままだと見づらいとの意見があった一方で、全ての電気を消してしまうと手元の資料が見えなくなってしまう、対応に苦慮しました。電気系統の工事はなかなか難しいかと思いますが、前方の電気のみ消せるような使用になると、よりスライドを活用できると感じました。
学科の取り組み：今年度から演習を半期化したことによる利点と弊害を観察し、必要な対応について検討する。
問題を抱えている学生情報の共有など。

学科や大学全体として取り組むべきことについて
正当な申し出とクレームとを弁別する基準作り
20人という大所帯において「演習」が可能かどうかを再検討すべき。
教員が研究成果を上げ、それを授業で学生に提供できるようにすること。
学生のレベルが均質でなく、優秀で熱心な学生も多いが、その一方で最初から授業に取り組む意欲がなく、諦めてしまっている学生が増えている印象がある。この授業でも、そうした学生が後方の席に座りスマホをいじっていて、授業や映画に集中できない、という声が出ており、そうした学生へのサポートのあり方を検討すべき時期がきているのかもしれない。
出席確認をもっと厳格に行う必要があるように思います。そのために、公正かつ公平な出席確認方法やシステムの導入を検討することが必要なように思います。
90分授業と100分授業の謝金が同額な事について、検討の余地がある。
大人数授業に対する教室の整備をお願いしたいです。本授業は第一回の授業では教室に学生が入りきれず、教室変更を行い、収容人数を満たしているとのことで階段教室になりました。しかし、階段教室もほぼ満杯で、学習環境として悪かったです。大人数授業に対して、教務課等が間に入って教室交換の交渉などしていただけたらと思いました。
目標を学生にわかりやすく提示する。
FDの継続すること。
オンラインの良さをうまく取り入れながら、教育効果を高める授業運営形態を創造していく上で重要であるとともに、今後、オンライン技術と密接に付き合いながら仕事や生活と向き合っていく学生のスキル向上にも不可欠であると考えられる。運営上の利便性から対面の良さのみが強調されないよう留意する必要があるだろう。
ゼミ決定の際に、卒業へ向けて研究を深めたいテーマを荒削りでもあらかじめ示させるかたちでゼミを選択させる・選考することが望ましい。さもないと、リーダーの方がメンターよりよっぽど専門的知識を有していて、厳しい評価をつけざるをえない場合もある。
学科内では、卒論のリーダーコメントをメンターは踏み潰してはならない。さもないと、リーダーが真剣に査読する意義が薄れる。場合によっては、メールでも口頭でもよいので、教員間で双方向のコミュニケーションが必要である。
大学全体としては、今後、8学科体制や排他的性質の強い大学院体制のままで進むのであろうか。できれば、卒論指導に関して提出前にメンター以外の有識者(学科内、学内にいるケースが多い)の指導も得られる方式を検討すべきであろう。学科内では当然のことながら、学科を超えても、ということである。
教員ひとりひとりも、これを重荷とせずに専門家として指導を喜びをすべきであろう。これがアドホックの指導ではなく、これを可能とする体制づくりが必要ではないか。

学科や大学全体として取り組むべきことについて
1号館4階の教室はすべて非常に使いにくい。教室数が足りないのであれば、教室と廊下を挟んで反対側の、心理や教育の大学院用の小部屋（ぜんぜん使っていない）をなぜ教室として整備しないのか。
題材から学生なりに考える機会をもち、その内容を文章化し、他の学生の考えとシェアしたり、教員の考えについて考え、自分なりの考えを文章に表現する機会を持つことが有効なのではないかと思います。
反転授業・アクティブラーニングに関して、学習効果が高かったと学生が感じた事例を共有し、相互に参考にできる体制があると、大学全体として教育効果の向上につながると思われる。
学問を教えられる場であり続けるためには（難しいことかもしれないが）偏差値を上げる、優秀な学生を入学させるための努力を惜しまないことが必要であると思う。
ゲストスピーカーを招く講義は本学は少ないとの批判が学生からある。
学生の出欠管理システム（学生証を読み取る方式など）を導入する必要があると思います。
学生証の読み取りなどによる出席確認システムの導入
初回の授業に現れた際には、受講者のそれまでの学習歴等がわからず、初動の対応を誤ることがある。学生の個人情報を守ることは必要であり、かつ成人の大学生に対してそのようなことにまで配慮すべきなのか否かは悩ましいところではあるが、実際の状況としては、学生の学習歴等を知っているほうが、特に演習形式の授業は進めやすい。このような情報がないことによって、受講者全体に不利益になることが多くなってきているように感じる。
可能ならば、成績表のみならず、より詳細な、個々の学生の入学時から卒業時までのプロファイリング
SNSの環境や、様々な機材の整備が十分ではない教室があり、Wi-Fiに繋がりがなかったり、整備されているものが古い機種などで映像を見ることができない教室もある。学習環境の整備を切にお願いしたい（特に2号館）。 それらがスムーズにいくことで、学生も積極的に授業に参加できると思われる。
授業アンケートで、「教室の椅子と机の高さがあっていなくていつも体が痛いです。（…）これは授業に関わらず3号館の机すべてに当てはまります」というコメントが寄せられた。個人差がある問題なので対応はなかなか難しいと思うが、一応、情報共有をさせていただきたい。

学科や大学全体として取り組むべきことについて

この授業は、資格取得とも関連するので、特にそうであるが、①②でも述べたように、実際の現場での（現実的）課題にまず触れ、高い意識のもとに主体的に課題解決をはかっていく過程の経験が効果的であったが、これを授業時間内だけではなく、予習・復習を通して、またその際に個人だけではなくグループで探究できるようにしたい。

残念なことであるが、多くの課題が出された授業の予習（次の時間の）をこの時間にこなそうとしている学生が教室の後ろの方を中心に見受けられる。この授業で、もし多くの課題を出した場合に、他の授業でもそのようなことが起こることが予想される。悩ましい問題であるが、時間をかけて解決していかなければならない。

来年度からシラバスに予習・復習の時間が示されたことは1つの方策ではあるが、これがQ2の質問の結果に反映されるのには（全ての授業において）、時間割の余裕、そして学生とともに自戒を込め我々の意識や実際の行動が変わらなければならないと思う。

今、取り組むべき（取り組める）こととして、履修要覧には各学科の（アドミッションポリシー）、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、卒業生像、カリキュラムマップ、各授業科目という明確な、ある意味「逆向き発想」で履修過程が示されるようになったことはよいと思うが、履修要覧にしめされたこの履修過程あるいはディプロマポリシー、カリキュラムポリシーと各授業科目との関係性というか位置付けがより理解できるようなわかりやすい示し方の工夫が必要ではないかと思う。例えば、単純なことであるが、全学ディプロマポリシー、各学科ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、学科専門科目、自由選択科目などのワードの関係を図示し、最初に示すというように。極めて当たり前と我々が思っていることが、意外に学生に伝わっていないのではないように感じる。今回の調査でQ5のシラバスの記載内容に関する質問でもどちらともいえないという回答が少なくなかったが、シラバスに記載されていることについても、成績評価のところは別としても、学生がきちんと理解しているか不安である。教員個人として、授業開始時にきちんと説明することも必要であるが、学科や大学としても、できるだけわかりやすい可視化を工夫しながらガイダンスする必要があるのではないか。

最新の機器への対応（特に Mac の PC 対応）。

学習支援センターの環境が整っていることで学生は円滑に学ぶことが出来た。ICT 活用によって授業時間外の学修が充実するような継続的な環境整備と支援が必要である。

教室環境の改善。縦長の教室ばかりで人数の多い授業では後方に座席をとる学生の態度が悪くなる。

1年次からの基礎学力の向上。大教室でもグループワークやディスカッションをしやすいように、可動式の机と椅子を導入すること。

心理学統計法はできればTAがいたほうが良いと思いました。

学科や大学全体として取り組むべきことについて

この科目については特に思いつかない

ゼミをより充実化させるためには、週1回1コマというのは無理があるように思っている。集中的にできるといいかもしれないと思っている。

本講義のように人数が多い講義では工夫をして一方通行ではないよう努め、本学の特徴でもあるきめ細やかな指導という意味ではゼミのような人数の少ない講義で、個々をより大切にした指導をすることが重要だと思われる。

また、総合現代教養演習（今年度は金曜後期3限）のように学科・専門を超えた講義が増えるといいと思う。

生成系 AI によるレポートやリアクションなどの提出への対応策を検討する必要がある。また、出席の代返、なりすまし、レポートや卒論の代筆なども厳格に対処することを明確化する必要がある。

5) アンケート結果について (結果について・学生のコメントなど)

学生からの授業評価の中で、授業担当者が特筆すべきと感じたコメント等をあげてもらった。

アンケート結果について (結果について・学生のコメントなど)
英語の教材を使うと学生のレベルが均質でないため、理解が乏しい学生もいて配慮が必要
I was sorry that not many students responded, but I also told them late. This was a really busy semester. My apologies.
授業内に実施し、当日欠席や遅刻者がいたため回答数が少なく参考程度ではあるが、提出された回答を見ると全体的に満足度が高かった。自由記述を見ると、学生と教員、学生同士の距離感を重視しているように思えた。
回答が2名だけ、しかも2年生対象のクラスなのに回答したのは基礎課程の2名のみ
以下のようなコメントがある：必修科目であり受講人数が多いが、ちょうど一杯になるぐらいの座席数なので詰めて座らなければならない。もう少し快適な環境で授業を受けたい。
「サポートが手厚く、自分が抱えている疑問や課題を素早く解決してくださった」「成長できる2年間を過ごさせていただいた」など概ね指導については高い評価を得た。
初めて実施する演習スタイルだったため、自由記述欄に授業の改善点を積極的に提案してほしいと教員から要望した。そのうちすぐ実行できるものは、後期の「近代文学研究1(2)」に取り入れた。
満足度は4(16%)、5(81%)でまあまあ。わかりやすさも4、5で100%だったので安心していている。教授法の理念は複雑なものもあり、学生は整理に苦労しているので、わかりやすさは常に気を配っている。
回収率が79%でやや低かった。満足度は「よくあてはまる」67%、「ある程度あてはまる」28%、合計95%で例年通りだった。「どちらとも言えない」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」が各2%(1名ずつ)だった。
満足度が普通という学生が6%あった。せめて、ある程度以上に引き上げる必要がある。困難かもしれないが、それを目指すことが教員の責務でしょう。説明の仕方が不満だという学生も6%いた。こちらは教員として猛省が必要。誰にでもわかりやすく、も容易ではないが、それを目指すことを放棄したら、教職に就く資格はないでしょう。
授業を丁寧かつ、ゆっくりと進めたこと、資料を充実させたこと、数分の中休みを設けたことが評価された。

アンケート結果について（結果について・学生のコメントなど）

◆授業に関する質問（26名回答）

Q1. 授業はどの程度理解できましたか？（「とてもよく理解できた=54%」「よく理解できた=42%」「普通=4%」「あまり理解できなかった=0%」「全く理解できなかった=0%」）

Q2. 授業にどの程度満足しましたか？（「とても満足した=77%」「満足した=19%」「普通=4%」「あまり満足しなかった=0%」「全く満足しなかった=0%」）

Q3. 授業を受けてどの程度英語力が向上しましたか？（「とても上達した=19%」「上達した=50%」「どちらでもない=19%」「あまり上達しなかった=0%」「全く上達しなかった=0%」）

◆授業内で楽しめた活動（26名回答、回答の多かった3つは以下の通り）

プレゼンやスピーチ=10名、各種 speaking activity=6名、英語関連の行事に関わる activity=6名

◆学生のコメント（直接引用の形で一部紹介）

- 発言がしやすい空気感で、英語が苦手な自分でも意欲的に取り組めた。
- 英語にとっても苦手意識を持っていたが、英語の使い方が間違っていたり表現方法が分からなくても積極的に発言しやすい雰囲気があって良かった。発言から英語の表現方法をたくさん学ぶことができた。
- 高校の時の英語の授業とは違い、授業のほとんどが英語で行われており最初は困惑したが段々と授業に慣れていくことができ良かった。自分と似たような英語力の人が集まって授業を受けることができてやりやすかった。
- 授業の内容や活動などとても興味深く、自分が普段注目しない事柄を英語を通して考えることができた。また、積極的に自分の意見や答えを発言することができ英語での表現を身に付けられたので、これからもこのような姿勢を心掛けていこうと思った。
- この授業を通して、英語力が上がりました。また、ライティング力も上がったと思います。
- 英語が苦手な私でも聞き取れるよう、丁寧に詳しく分かりやすい授業でした。ライティングスキルが上がったと思います。
- 先生も優しくレベルが自分に合っていて楽しかったしジェネラルテストの結果が上がっていたのが特に嬉しかった。
- 入学当初とても不安でしたが、良き先生と友達に出会えてとても楽しく授業を受けることが出来ました。
- とても楽しかった。クラスメイトも先生も優しい人ばかりだったので、穏やかな雰囲気の中で授業を受けることができ楽しかった。
- 自分のレベルに合っていたと思います。英語は苦手ですが、先生のおかげでとても楽しく授業に参加出来ました。

アンケート結果について（結果について・学生のコメントなど）

<結果について>

- ・Q2 この授業のために予習・復習をした時間

30%が「週2時間以上」、40%が「週1～2時間」と、予復習に時間を費やしている学生が多数いたことがわかった

- ・Q4 授業の満足度、Q6 教員の説明の仕方、話し方のわかりやすさ、Q7 授業中に使う教材が学習の役に立ったか、Q8 毎回の授業内容の分量や速度が適切だったか、について

90%が「よくあてはまる」と回答しており、本授業の目標は達成できたと考える。

<学生のコメント>

- ・深い学びができた。
- ・人物の心情や背景に関する丁寧で細かい解説が毎回あり、授業が終わるときにはその章を納得して終えることが非常に良かった。
- ・自分の担当箇所をみんなに発表することで、自分の課題への責任感やモチベーションにつながった。
- ・同じ作品を、同じ世代の人が同じ時間に共有しても、それぞれ感じ方が違うことに気づき、とてもおもしろかった。
- ・先生がいつも私たちの英語を理解しようとしてくださり、一人一人の意見に丁寧に反応して下さったり、質問をして深めようとして下さったのが、とても嬉しかった。
- ・卒論に関して相談に乗ってくださり、とても助かった。

本調査の「Q2. 目標を達成する上で効果的だった方法や工夫はどのようなものですか。」を学生に答えさせる。

1年次生を対象に、大学で学ぶ歴史学とはどういうものかを伝え、歴史学に興味を持ってもらうことを目的とした授業であり、学生のコメントから、その目的は達することができていた。文字資料に加え、映像資料を活用したことも、学生から好評であった。しかし、アンケート結果からは予習・復習に十分な時間がかけられていない様子もうかがわれた。1年次生に負担をかけ過ぎないように配慮しつつ、今後改善したい。一部学生からは、授業に受動的になってしまったとの意見もあり、学生参加の（歴史に関する）ミニ・ゲームなどの提案もあった。さらに工夫したい。

出席率、満足度、説明、教材、授業運営など、いずれも比較的高評価だったので良かったと思う。後ろの方の席でスマホをいじっている人がいるので不定期に後ろの様子を見に行った方が良い、という意見も出ており、広い階段教室のため教壇からは後ろの方の席が確認できないため、副手に見回ってもらうか、それが無理な場合は座席指定にして時々席替えをすべきか検討したい。

- ・「アフリカ人へのインタビューが楽しかった」、「教員の説明が分かりやすかった」、「普段話ができないような人にインタビュー出来て、非常に勉強になった」「他学年と交流できて楽しかった」「快適に授業を受けられた」「冷房の利きが悪かった」というコメントがあった。

- ・8グループは意図的に学年をミックスさせ、やりにくいかと心配もしたが、とくに問題は発生しなかった。

アンケート結果について（結果について・学生のコメントなど）
<p>授業アンケートは授業内容に関しては概ね良好であったが、教室や学生同士の私語についてのクレームが数件あった。</p>
<p>・自分のペースですすめられてよかった。・面談が定期的にあったのはよかった。・オンラインで教員と1対1で相談する形は良かった。・全員で進捗状況を確認する機会がもっとあってもよかった。</p>
<p>肯定的な記述ばかりでした。</p>
<p>学生の満足度は65%が「よくあてはまる」、33%が「ある程度あてはまる」としており総じて高い。また、教員の授業運営（私語の注意など）も9割が「よくあてはまる」と回答しており、自由記述にも私語への適切な注意への感謝のコメントが見られた。ただし、逆に言えば、他の多人数授業における私語の状況が気になる。予習復習に関しては3割程度が「30分以下」としておりやや少ない。</p>
<p>ゼミで卒論に取り組むことに勤しむあまり、アンケートを学生にフォームズで記入させることができなかった。演習の学生とは後期最後に懇談の機会を設け、個別にコメントを得た。ゼミでの丁寧で人間的な指導、また学生同士で他者のテーマを深く知り合い読み合わせの際に的確なコメントを忌憚なく指摘し合えるようになった信頼感、率直さのある雰囲気好ましかったとのこと。また、教員が一人一人を見ながら段階的に少しずつ課題と短期目標を与え、学生はそれに応じてそれぞれのペースで思考と研究を積み重ね書き進めたため、ぎりぎりの執筆や無理のあるスケジュールを強いられることなく誠実なゼミだったとのこと。</p>
<p>おおむね「満足」という回答だった。</p>
<p>回答されたものについては、概ね良好な回答状況でした。ただ回答数が少ないので、比較的评价の高い学生が回答しているようですので、もう少し幅広い学生から回答が得られるようにすることが必要かなと思いました。</p>
<p>授業内容や講義資料については、「分かりやすかった」「勉強になった」というコメントが多くを占めたので、現在の方向性で質の向上に努めていきたい。授業内では、社会全体で意見が分かれるような論争的な話題もいくつか扱ったが、教室内でのディスカッション等はあまりできなかったので、そのような時間を確保できるよう、講義内容を精選して時間配分を工夫したい。</p>
<p>コメントを書いた学生は概ね満足をしているようだが、授業を理解することが難しい学生もいるのだろうということを数値から読み取った。日頃声を発する学生は積極的な学生が多くもっと難しいことも教えて欲しいと言うが、そうではない層も教室にはいることを考慮し、今後どう対応するのが両者にとって良いのか考えて行きたい。今年度までは教職課程の関係でシラバスの自由な変更ができず、ディスカッションをするということがシラバスに書いてなかったのにディスカッションを行ったことについてクレームが1件あった。</p>
<p>ゲストスピーカーの話を聞いて、理解が深まったとのコメントが多い</p>

アンケート結果について（結果について・学生のコメントなど）

事前のコメント提出については、自力で文章を読む力、書く力、予習をする習慣を身につけることができ、演習での議論にも参加しやすくなったなどの意見があった。またテーマについては、さまざまな考え方があることが知れてよかった、授業時間については、ふと思いついた意見でも自由に発言することができ、かつお互いの意見に皆が真摯に耳を傾けられる雰囲気があった、との意見があった。

また、事前コメント提出のための予習と発表担当日のレジュメ作成の準備が必要なため、予習・復習の時間が総じて高い傾向にあった。総合的にみた満足度は全員が満足と答えた。

「受講前からこの授業の内容に興味・関心があった」との問いに対して「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と答えたのは全体の32%であった。対して「総合的にみて、この授業に満足した」との問いに「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と答えたのは4%に留まり、授業の工夫等に一定の成果が見られたものと思われる。

一方、「教員の説明の仕方、話し方はわかりやすかった」「毎回の授業内容の分量や速度は適切だった」の各問いに「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と答えたのはそれぞれ4%であり、授業における説明の方法や授業資料について一層の工夫が必要と考える。

自由記述の回答の中に、もう少しゆっくり一つ一つの話聞いてみたかったとの記載があった。概論という授業科目の性質上、一つのトピックを長く論じることはできなかったが、学生の興味を深め、発展的な学びへと繋げるための工夫を考えたい。

アンケート調査結果については、概ね肯定的な回答が得られた。改善すべき点については「教員個人が取り組むべきこと」の欄に記載してある。

アンケートの回答率が低く(25%)、十分に実態を把握できているかは不透明であるが、授業の進捗等について概ね肯定的な回答が得られた。ただし、この結果は「授業前からこの授業の内容に興味・関心があった」との問いに「よくあてはまる」「ある程度あてはまる」と回答した学生が100%と、事前に興味関心を頂いていた受講者が多かったことに起因するようと思われる。そのため、授業評価アンケートの結果以外の方法で学生の反応を確認しつつ、授業内容の改善を図りたい。

アンケート結果については概ね肯定的な回答が得られた。

内容的に難しく、授業当初は戸惑うところもあったようだが、授業を通して、一つのテキストを読解し、相互に意見交換するなから、文献やそこで語られる思想の理解を深める、ということが実現できたようである。

概ね良好だった

アンケート結果について（結果について・学生のコメントなど）

この授業に関心があるともないともいえない、あるいは関心のない学生が一定数いるなかで、概ね満足した学生が8割を超えたことに、授業担当者としてまずは安堵した。

学生からのコメントには以下のようなものがあった（コメントは抜粋）。コメントを真摯に受け止め、善処したい。

- ・部屋が暖かすぎて倦怠感で授業に集中できないことがあった。
- ・前期はエアコンがききすぎていてか、少し寒さを感じることもありましたが後期はとても快適でした。

→今後、授業環境の整備により配慮したいと思います。

- ・他のキリスト教学のクラスとの難易度に差があり、難しかった。

→様々なキリスト教学の科目が用意されている意義を受講生に感じてもらえるよう説明を尽くしたいと思います。

- ・キリスト教を感じすぎない授業で、参加しやすかった。
- ・さまざまな視点から文献などを用いてキリスト教の教えとは何かを学ぶことができ楽しかった。
- ・キリスト教の基礎知識（カトリック校）出身でなくても分かりやすかったです。批判的な視点からも学べたことが良かった。
- ・私はキリスト教に関して「こういうものだ!」とやや決めつけのような考えがありました。しかし全受講後はいい意味での私のキリスト教観を打ちこわし、より深くキリスト教の在り方について理解することができました。
- ・とても安心できる授業でした。

音声が届きづらいとのコメントが複数ありました。室温やマイクの音量など、授業環境に配慮するよう改善します。

- ・真ん中の方に座っても声が聞きづらい時があるため、もう少しマイクの音を上げていただきたいです。
- ・日によってエアコンが効きすぎてて、少し寒い時があったので改善してほしいなと少し思いました。

アンケート結果について（結果について・学生のコメントなど）

授業内容については概ね満足してもらえたが、難しさを感じる学生がおり、今後より分かりやすく伝えられるよう努力していきたい。

以下、学生のコメント抜粋。

- ・冒頭に必ず、前の週の振り返りや他の受講者のリアクションの共有があり、講義の理解に自信が持てなかったときも、助けられました。
- ・ギリシアの思想とヘレニズムの思想の相関性についてよく学ぶことができたので、よかったと思います。また、資料を共有してくださったので、助かりました。楽しく哲学を学ぶことができました。
- ・参考図書やテキストもとても面白く、興味深いものでした。哲学の授業をまた受講したいです。
- ・哲学をあまり学んだことがない人にとってはとても難しく感じる内容だったので、もう少し初めでも分かりやすいようにして頂ければと思います。
- ・よかった点は、配布資料が見やすく、また授業の冒頭で前回の講義の復習があったことである。改善すべき点は特にはないが、少し講義内容が難しく感じた。

- ・プレゼンテーションを行ったり、ディスカッションをしたりした点から、自分の意見を伝えたり他者の意見を聞いたりすることができて、問いや疑問を自らが解決することができて非常に満足している。
- ・自分の考えを言語化する力を培えたと思います。
- ・この授業はすごく自分の身になるものだった。プレゼンテーションの発表があり、いろんな人が調べた情報を沢山聞くことができて面白かった。
- ・よかった点は、考える時間があったことと、それを友人と共有する時間があったこと。大学に入り、レポートなど、自分の意見と向き合う時間は多くなったが、人の話を聞く時間が少なく、聞き手の対象の幅も狭くなったので、この授業を受けることが、いいきっかけになった。
- ・生徒の意見を聞いて、まとめてくださる所や、優しい話し方がとても素敵で受けるのがとても楽しかったです。
- ・この授業のよかった点は、先生がとても優しく、私たち学生の意見を否定せずに聞き入れてくださったため発言がしやすかったです。
- ・知りたいことが学べました。話し方がよく聞きやすかったです。

アンケート結果について（結果について・学生のコメントなど）

アンケートの回収率は37%（オンラインなので回収率を上げるのが大変か）。「総合的にみてこの授業に満足した」の項目は、「5」が50%、「4」が43%、「3」が7%。自由記述欄には、「先生の話す速度や雰囲気が丁度良くて居心地が良く講義を受けることができました。前回の講義内容の振り返りの時間を毎回作っていただけたりそれに対してコメントもしっかりいただけたので、疑問や不安が残らずに講義に入ることができていました。資料もわかりやすいのでこれからある試験も自分で振り返りながら対策できそうです」という声や、「受講者が書いた毎回のリアクションペーパーを共有してくれるところが特によかったです。同じ授業を受けた他者の考えから学べることも多く、ただ授業を受けて終わってしまうのではなく、リアクションペーパーから復習することもできたのでよかったです」という声や、「先生の説明がすごくわかりやすく、抽象的な内容になりがちな哲学系の話も具体例を交えてくれたことで楽しく聞けた。すごく良い授業」などの声が挙がった。

授業に対する評価はほぼすべてにおいて、8割以上の肯定的回答が得られたが、説明の仕方話し方、授業中に使う教材、毎回の授業内容の分量や速度、教員の授業運営の適切さなどに対して、一定どちらでもないとする者がおりその点は改善が必要である。授業資料や動画視聴で教員目線を持つことが出来た点や学生同士の交流の機会があり深い学びをできた点が高く評価されていた。

アンケート結果では、授業の満足度や授業内容、運営に関する問いであるQ4~Q9に対する回答は、全て「よくあてはまる」「あてはまる」の合計が100%となっており、授業内容や運営について多くの学生が比較的満足していることが伝わってきました。その一方で、授業外の予習・復習の時間については、あまりとれていないようで、「週30分以下」となる回答が62%もあるため、今後、授業外の学びをどのように設定し、授業内の学びとどのように繋げていくかが課題であると感じました。また、自由記述のコメントからは、事例を基に考えていく演習を通して自らの学びが深まったと感じているコメントが多くみられましたが、特に、その際、動画や写真等を用いた視覚的なツールの活用が有効だったと考えている学生が多いようでした。

「社会情勢を教育的な視点から見ることができた。」「リアペを書く時間が少し少なかった。」「みんなの意見を知ることができた。」等の意見があった。

演習課題にグループで取り組み、授業時間外にGoogle document等でまとめることが初めての経験だったので、よかった。これによって、最終的な個人研究発表がスムーズにできた。

前期のものなので、みつからなくなりました。遅刻常習者とみられる学生が出欠確認の方法について批判的コメントを書いていたのを覚えています。

北欧の教育と生涯学習を日本と比較することで、より深く北欧の教育についての理解を深めることができた、ゲストスピーカーのお言葉が特に印象に残った、などの感想が寄せられた。

アンケート結果について（結果について・学生のコメントなど）

・とっても楽しい授業でした。実践が多かったことも良かったです。・色々な技法を教えてもらえて貴重な授業でした。・先生のお歌を毎回楽しみにしていました。手が不器用なので図画工作に苦手意識があったのですが、色々な知識も増え、毎回楽しく作品が作れました。

授業での学生さんの反応とも相違なく、適切にコミュニケーションを取れていたことが確認できた。

学生も今回の授業に大変満足してくれて、お互いにコミュニケーションに相違がなくてよかったと思う。

私も初年度、学生にとっても初めての心理学統計法で、学生からのコメントには反省させられる部分も多くあった。この科目はカリキュラム上、行わなければならない内容が多い割に、文系学生だと全員が習得していない学習内容が多く、満足度の高い授業をすることが難しいと感じている。次年度からは、少なくとも統計にアレルギーを感じない、純粋に実証科学の手法としての魅力を感じてもらえるような授業に改善していきたい。

全般的に良い評価をいただいた。「優しい語り口調で経験も踏まえながらお話して下さったので、とても為になりました。メールで質問を送らせていただいたときも、丁寧に返信して下さったので、知りたい内容を詳しく知ることができました。」「普段はあまり考えない老後や高齢期について考えることができ、充実した時間を過ごすことができた。先生の伝え方もわかりやすかった。」「老年期について正しく理解することが出来た。とても充実した授業内容だったと思う。」

ただし、予習復習の時間はないようだったので、次回から方法を検討しようと思う。

心理臨床の実際の現場が分かって良かった、将来役に立つことをたくさん学べたというコメントが多く、現場のイメージを伴った生きた知識となったようで大変うれしく思う。毎回の振り返りからも、授業がこれまで／これからの自分や家族について考えるきっかけになったようである。DVD 視聴の時間が長すぎるといった意見もあり（1名）、視聴覚教材の取り入れ方も今後工夫していきたい。

内容については概ね良い評価であったが、通信については問題も見受けられ、改善が必要であると思われる。

「各先生方が臨床心理学、発達心理学などそれぞれの専門分野に基づいて講義をして下さったので毎回の授業楽しく受講することが出来ました。一方で動画が重すぎて再生するのに時間がかかることもあったのでその部分は改善してほしいです。」

「毎回、さまざまな心理学について学ぶことができたので、良かったです。」

「私は元々心理学に興味があったのですが、心理学としての学びだけでなく、心理的病気やそれに対する向き合い方、また日常におけるさまざまな心理学の発見をすることができました。オンデマンドということもあり落ち着いて授業を受けることができ、とても良かったです。」

「元々興味があった心理学について、心理学のさまざまな分野を学ぶことができて心理学について、また、心理学科に進んだ際の学習のイメージも掴むことができて良かった。」

「図書館や学食の通信環境が悪い点を改善してほしいです」

6) 「授業に関する調査」についての意見、提言など

多くの教員から、Google Form での回答としたことをきっかけに、学生の回答率の低さが大幅に低下した点が指摘されていた。対策としては紙ベースでの回答形式に戻すことも提案されているが、ペーパーレス化の方針に逆行するため、他大学の事例も参考にその他の方策を検討する必要がある。また、授業評価の項目設定に関する意見や、学部と大学院とで授業評価報告書の提出形式が異なることによる作業の煩雑さも指定された。これらの点に関しては、FD 協議会において議論し、今後のあり方を検討していきたい。

「授業に関する調査」についての意見、提言など
I think the survey is a good idea.
Q8 は「適切か」を問う質問だが、GPS アカデミックには難易度についてコメントがあったので、分量、速さそれぞれに多いー少ない、早いー遅いなどのスケールで聞くと、授業改善に役立つと思う。
別途将来構想委員に授業報告書を提出します。ここでの報告と一本化してもらいたいです。
Sophie 掲示で評価への協力を求めているが、回答率が非常に低い。改善を求む。
アンケートを Google フォームで行うようになってから、回答率の低下が気になります。匿名性を守りつつも、回答の有無は判断できるような仕組みがあるとよいと思いました。
本調査の「Q2. 目標を達成する上で効果的だった方法や工夫はどのようなものですか。」は学生に答えさせるべき内容だと思います。
学生アンケートは授業中に時間をとって実施する必要がある、そうでないと回答者が少なくなってしまいます。教員の報告を Google Form で提出することにしたのは良いと思います。
回答者を増やすための工夫を共有することが必要かもしれません。
特にないが、自身で記述することで改めて自身の授業を振り返るよいきっかけになっている。
できれば、学生に求めるこの調査は、かつてのような「紙ベース」のものを授業内で書かせる方が、学生からの回答率がよいと感じられる。ペンを持って紙に書くという身体的作業は、やらねばならないという責任感や、よく考えて言葉を選び伝えるという傾向を助長するからである。
1年、2年の第二外国語については、他クラスの調査結果をぜひ知りたい。聞けば教えてもらえるのかもしれないが、フィードバックの形式をもう少し整えてもよいのではないだろうか。
これらの情報を活かして、有効な取り組み内容としてフィードバックしていただければと思います。

「授業に関する調査」についての意見、提言など
回答率がなかなか上がらないので、効果的な依頼の仕方などを全学的に検討して頂きたい。
この形式のアンケートになって回答しやすくなった。
前期の科目については前期末に意見集約をした方がいい。年度末一括ではなく。
学科の授業報告はFD協議会で行われたと記憶しているが、それ自体あまり時間のかかることではないので、他教員・他学科の事例や指摘を全教員で共有するために、議題の少ない教授会などで行うことも検討してはどうか。
google フォームを用いたオンライン回答となって以降、回答率が低い。学生が科目名を自ら入力する必要がある等、回答作業に「面倒さ」を感じる学生もいるのではないだろうか。回答率を上げるための工夫が必要と考える。
回答率が低いのは課題であり、回答率の向上を図る必要がある。
回答率の向上を図る必要があると思われる。
回答率の改善を図る必要があると思われる。
自分の授業を振り返るよいきっかけとして活用しています。
今回授業時間内での実施が難しかったので、本日中の回答を求めたところ、回収率が低くなってしまった。次年度以降は、授業内実施としたい（全学的にもそのようにしたほうがよいのではないか）。
結果をグラフでも提示するとより良いと思いました。
Google フォームの記入のために授業時間を使うのが勿体ないと感じられたので、Google Classroom にフォームの URL を掲示したが、回収率はあまり良くなかった。
学部は Google Form で、大学院はワードになったりしているの、フォーマットを統一してほしいです。授業も多数あり、学生のアンケート結果の共有は別の形式で行われているので、情報がバラバラで混乱します。他の大学では学生のアンケート結果にはそれに付随して返答する機能が設けられていましたが、このアンケートが最終的に何にアウトプットされるのか、いただいたメールだけでは理解できませんでした（新任だからかもしれません）。各教員の担当教科ごとにエクセルフォームなどを共有してくれたほうがまだ漏れなく作業できるのではないのでしょうか。。。

「授業に関する調査」についての意見、提言など

アンケートの質問項目が「効果的な授業方法」などと記載されていて、効果的な授業をしたことが前提となっていて、私自身は全体として授業はうまくいっていても、反省のない授業はないので違和感を持ちます。この調査の趣旨は、おそらく授業の良い部分や悪い部分を振り返って次年度の授業に繋げていくためのものだと考えると、授業の中で発生した問題や課題、次年度へどう活かしていくかといった部分を質問項目に入れたほうが、教員として授業を振り返るきっかけになると思いました。また、「学科・大学全体として取り組むべきこと」という項目を各授業の報告として書かせる意図はなんでしょうか？結構大きな話題すぎて、授業とは必ずしも関係なくなるような気がします。

学部と大学院で方法が異なり、教員の中に戸惑いが見られた。

このような方法で全学科学部・大学院で収集するには、教務課の労力が大きいように思った。

Google Classroom で案内したうえで、最終授業の時間内に少し時間を取ったのですが、回答していない人も多かったのは残念でした。回答内容は匿名でも、回答したかどうかのチェック（授業の出欠に反映）ができればと思います。

GoogleFormsの方が回答しやすいです。

ますます形骸化しているように思われるが「実質化」すべきだとは思わない。授業評価というシステム自体、そろそろ賞味期限切れではないか。また、教員が授業評価を行わない授業について、クレームを寄せるために、これを利用するケースが見られた。教員の言動に対するクレーム対応は必要だが、それと授業評価は別であるべきだ。

7) その他

その他
大学の授業は高度なことを扱うべきだと考える。難しい内容をわかりやすく説明することに意を注ぐのが本来であり、内容のレベルを安易に下げるのは望ましくない。学生には初回到授業の目的と合わせてそのことを伝えた。配布資料と説明のわかりやすさに留意し、一定程度、実現できたと思われるので、今後もこの方針で取り組んでいきたい。
授業中（開始前や終了間際でなくても）であるにもかかわらず、廊下を歩きながら大声で会話をする学生が後を断ちません。対策を講じていただくと助かります。
Google フォームでの提出になったのはよかった。
Q7（テキスト・配付資料・映像など）は授業内容に該当しないので、回答側に戸惑いがあったのではないかと思う。
履修取り消しシステムについて：すでに教務課に相談済みですが、上限人数まで達したものの、授業開始段階で上限の半数しか履修しない事態になってしまいました。学生からも相談がありました。来年度は上限人数で授業が実施できれば幸いです

第3章 学科・専攻による授業報告書

学生による授業評価の結果をフィードバック後、各教員は自身の授業を振り返り、その成果や課題等を「授業報告書」として提出するが、これらを学科レベルで取りまとめ、学科・専攻コースの授業報告を作成する。以降は各学科の報告である。

学科・専攻コース名 英語文化コミュニケーション学科

1. 授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

概ね達成できている。(達成できた・ある程度達成できた のどちらかの回答であった)

2. 目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など

(他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください)

プレゼンやスピーチ、各種 speaking activity、英語関連の行事に関わる activity、グループディスカッション、教科書、配付資料、視聴覚教材、教室 (座席の変更ができる教室・演習室など)、学内システム、小テスト、授業内での課題、予復習の課題、私語への注意、対応、厳格な出欠席

3. 今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

・1年英語について、全学共通・必修科目で全21クラスあり、成績評価や課題の分量などに関して、クラス間の公平性の確保が長年の課題であったが、成績平準化を構想中である。

担当非常勤講師との情報共有が不可欠であるため、毎朝、講師控え室にて積極的にコミュニケーションをとることを心がけている。

・大学生活の不適応が顕在化する場でもあり英語に苦手意識をもつ学生も年々増えているので、教務課、MCAL、学生相談室など学内関連部署との連携の重要性が増している。

4. 学科・専攻コースの立場として大学に望むこと (意見、提言など)

・3で記述した事項で、成績の平準化、担当者とのコミュニケーション、教務課、MCAL、学生相談室など学内関連部署との連携

・本学には100人以上収容する教室が非常に少なく、大人数講義では詰め込まれすぎになり学生にとって快適でない。今は試験の時に一人おきに座らせることができず、学生からも不満の声があがっている。改善が望まれる。

5. 授業評価に関する感想、要望

・ワードとオンラインフォームによる授業報告を一本化してもらえると労力の無駄が省ける。

・回答した学生が少ない

1. 授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

- ・多くの授業で目標を「ある程度達成できた」。
- ・学生の満足度も概して高く、「よくあてはまる」「ある程度あてはまる」という回答が95%以上だった。
- ・日本語教員課程の資格関係の授業は、学生の意識が特に高かった。それに応えるために、学修の内容と日本語教師の仕事との連絡を意識して説明することを心がけた結果、わかりやすいという感想が多く寄せられた。
- ・その一方で、学力不足や心身不調で授業に付いてこられない学生が若干名いた。課題を期限内に提出できない学生も増えている。必要があると判断した場合は、学生相談室の協力を得て対応した。

2. 目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など

(他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください)

- ・演習発表の担当学生に対して事前指導を行い、授業前に資料提出のリマインダーメールを送付した。
- ・演習発表に対する質問・意見を、その場で言うだけでなく、授業後に GoogleClassroom の質問コーナーに投稿するよう受講生全員に義務づけ、それらに対し、発表者が回答を投稿する全員参加の仕組みを作った。その結果、受講生の質問力・回答力が向上し、演習への積極的な取り組みにつながった。
- ・初めて実施する演習スタイルについて、学生に指示して前期アンケートの自由記述欄に改善点を提案してもらい、実行できるものは後期からすぐに取り入れた。
- ・講義であっても受身にならないように、授業内課題を出し、学生同士でグループディスカッションする活動を毎回行った。
- ・授業内課題を Google フォームで提出させ、回答をその場で共有する取り組みは、双方向の授業となり、学生の反応もよかった。
- ・リアクションペーパーを授業後に Google フォームやメールで提出させ、回答を次回授業でフィードバックした。
- ・日本語教育の授業で、社会で実際に日本語教育に従事している方をゲストスピーカーとして招聘し、学生の関心を高めた。
- ・講義で使用する全資料を初回までにドライブにアップロードし、学生が一括して入手できるようにした。
- ・出欠席を厳格に記録し、継続的に受講する習慣を身につけさせた。
- ・授業時間を前半と後半に分けて間に10分間の小休憩を入れ、後半も学生の集中力が途切れないうようにした。

3. 今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

- ・今年度から演習を半期化したことによる利点と弊害を観察し、必要な対応を検討する。
- ・今年度から始まった「日本語日本文学入門」は受講者数が非常に多かったので、運営の仕方を検討する。
- ・教学面で問題のある学生の情報を学科内で共有する。
- ・学科内FD研修を継続的に行う。当学科は以前から教育方法や学生指導について教員同士で話し合う組織的な習慣がある。

4. 学科・専攻コースの立場として大学に望むこと（意見、提言など）

以下、設備について

- ・備え付けのPCに有線マウスを接続すると（学生の研究発表に必要だったため）、しばらくは問題ないが、やがてカーソルが動かなくなるトラブルが頻発した。
- ・教室でWi-Fiが全くつながらないことがあった（学生のアンケートにも指摘あり）。
- ・203番教室4限の授業で、ワイヤレスマイクの充電が切れていて使えないことが3回に1回程度あった。
- ・204教室など黒板灯が独立していない教室がある。学生から、スライドを使用する際に電気をつけたままだと見にくいとの意見があったが、完全に消してしまうと手元の資料が見えなくなるので、対応に苦慮した。前方の電気のみ消せるようになると、より効果的に活用できると感じた。

5. 授業評価に関する感想、要望

- ・アンケートをGoogleフォームで回収するようになってから、回答率の低下が気になる。匿名性を守りつつも、回答していない学生に回答を促すことができる仕組みがあるとよい。
- ・全学的にアンケート類が増えているので、1つ1つのアンケートの回答率が下がっているように思う。

学科・専攻コース名 史学

1. 授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

概ね達成できた

**2. 目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など
(他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください)**

クラシカルではあるがレジュメなど配付資料の充実が重要と思われる。パワーポイントやGoogleClassroomなどの使用も不可欠となっている。

3. 今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

特に一年次生向けの授業などにおいて、受講者にとって最適な予習や復習のあり方をこれまでに引き続き模索していく必要がある。

4. 学科・専攻コースの立場として大学に望むこと（意見、提言など）

授業の質向上に最重要なのは教員が自身の研究成果を積み重ねることであるという共通認識を改めて大学全体で共有していく必要がある。

授業中に廊下を歩いている学生の私語の音量について、もう少し注意喚起していく必要がある。

5. 授業評価に関する感想、要望

本調査の「Q2. 目標を達成する上で効果的だった方法や工夫はどのようなものですか。」を学生向けの授業アンケートに盛り込んで欲しい。

1. 授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

報告された科目に関しての目標達成度は概ね高い（全ての科目が「1. 達成できた」あるいは「2. ある程度達成できた」）。本年度より入門科目以外の講義科目の多くが4号館の教室を利用した対面での実施となった。ホールを教室とした履修者が100名を超える授業も実施されたが、それら大人数の授業においては私語の抑制や試験の運営などにおいて苦労した科目もみられた。

2. 目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など

（他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください）

ゼミなどの少人数の科目に関しては、学生が意見や質問をしやすい雰囲気をつくることや慣れさせるような工夫をしたことで、ゼミ生同士が円滑に協働で課題にとりくむことができ、結果的に積極的に卒業論文にとりくむ学生が増えたという報告があった。同様に、40名ほどの講義でも、グループワークを行いディスカッションの時間を設けることで、学生の積極的な参加が見られたという報告もあった。

ホールで実施した大人数の講義科目では、授業内で課題にとりくむ時間を設けて、5分から10分ほどの休憩時間を確保したものもあった。学生にとっては気分転換の機会になるようだった。またその際に課題のフォームに自由記述欄を設けて、授業中に気づいたことを自由に教員に対して報告できるようにした（部屋が暑い、私語が気になる、授業内容についての質問など）。口頭では言いにくいこともフォームを通じてその場で教員に伝えることができ、また教員も授業再開に際してコメントを返すことができる。学生には好評のようだった。

学生がGoogle クラウドに習熟してきているように感じる。授業資料などは紙で配布せず、PDFで共有するという方法がデフォルトになりつつある。

3. 今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

ICTを用いた授業運営にあたり、教員の側もそのスキルを身につける必要がある。また、学生自身によるPC等におけるファイルの管理について、基本的なことから指導する必要があると感じる。たとえば、フォルダで授業ごとに資料を管理することや、バックアップをとることなどができていない学生が見られる。学科としては2年次の演習や3年次のゼミでも改めての指導が必要であると考えるが、基礎課程演習等において初年次教育のメニューに加えてもよいかもしれない。

2024年度より学科のカリキュラムが新しくなる。概論必修科目を減らすことで履修における自由度を上げるとともに、社会調査士科目も時間割を組み替えて、基礎科目から応用科目への積み上げが円滑になるように整えた。大学院の社会文化学専攻も新体制となり、人間関係研究領域では早期修了学生制度も導入される。大学院への進学も学科卒業生における進路の選択肢の一つとして示し、学生の修学意欲の向上を図りたい。

4. 学科・専攻コースの立場として大学に望むこと（意見、提言など）

(1) ICT の活用について：3でも述べたが、自分のデバイスを使いこなせていない学生が一定数いる。「AI・データサイエンスの基礎」について学ぶのとは別に、道具の基本的な使い方を学ぶ機会が必要ではないかと思う。また、入学者の多様化が指摘されるなかで、デバイスだけではなく、Sophie、Gメール（毎日受信確認することなど）、Google クラスルーム等の基本的な使い方についてできるだけ早いタイミングで指導した方がよいのではないかと思う。

(2) ST 比について：ひきつづき、ST 比を勘案した学科受け入れ定員の調整を希望する。2024年度は教員が1名増えることもあり、10名を超えて学生を受け入れるゼミはなくなった。これはおそらく人間関係学科において過去15年間にはみられなかったことである。これを継続したい。

5. 授業評価に関する感想、要望

回収率を上げることが課題である。以前、紙で実施していた際には、授業中に時間をとり、その場で回答してもらい回収していたと記憶している。フォームで実施する方がとりまとめも含めて便利ではあるが、その場合も授業時間内に回答のための時間を設けてもよいかもしれない。

教員の報告書がフォーム提出になったのは学科の授業報告書を作成するにあたってもとりまとめがしやすく、よかったと思う。

1. 授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

ほとんどの教員において、授業の目標は概ね達成できた。だが学生の質の多様化により、これまで有効であった教授方法が機能しなくなり始めている。教員の言うことが理解できない学生が増えている。この状況自体はすぐに改善するものではないので、教員側が今までのやり方を改め、あるいはアップデートを行い、根本的に教育方法を構築し直す必要が感じられる。

2. 目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など

(他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください)

学生が何を考えているのか、文章の上で明晰に発信する力を向上させるため、根気強く問いかけながら本人の言葉を引き出す。

しばしば、知識不足のため思考や議論が発展しない場合が見られる。そんなとき教員は、読むべき文献や、調べてみるとよい著者、訪ねるべき資料館、ウェブサイトなどをヒントとして提示して、導く。

外国語学習における ICT ツールの活用と生成 AI の適切な使用を指導し、学生の言語習得を支援すべき。スピーキングの機会を増やすことも重要。

授業で学んだ理論や内容で理解可能な新聞報道やテレビ報道を読み、学生同志でディスカッションを行うことで、自分の理解を確認したり、自分の意見を発信できたことに快感を覚えたり、他者の意見に刺激され奮起したりするなどの現象が観察された。

また学生のリアクションペーパーを GoogleClassroom を通じて匿名で教室内で回覧した (GForms で各学生の承諾を取った後に開示する。開示を拒否した学生のものには開示しない)。教員からのコメントや質問への回答を履修者全員が読むことができる。学ぶべき基礎が多い講義科目で、学期も中盤にさしかかると、学生の質問や学生の独自調査への正のフィードバックをする時間が授業内で取りにくくなるが、このかたちで教員と学生の双方向性を担保でき、学生同士の横方向への連携も確保できる。「同じものを聞いて理解やコメントが自分とはこんなに違うのかと刺激を受けている」「楽しい」という感想を耳にすることが多い。

3. 今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

ゼミ決定の際に、卒業へ向けて研究を深めたいテーマを荒削りでもあらかじめ示させるかたちでゼミを選択させる・選考することが望ましい。さもないと、リーダーの方がメンターよりよっぽど専門的知識を有していて、厳しい評価をつけざるをえない場合もある。

学科内では、卒論のリーダーコメントをメンターは踏み潰してはならない。さもなければ、リーダーが真剣に査読する意義が薄れる。

場合によっては、メールでも口頭でもよいので、教員間で双方向のコミュニケーションが必要である。

学問を教えられる場であり続けるためには (難しいことかもしれないが) 偏差値を上げる、優秀な学生を入学させるための努力を惜しまないことが必要であると思う。

4. 学科・専攻コースの立場として大学に望むこと（意見、提言など）

大学全体としては、今後、8 学科体制や排他的性質の強い大学院体制のままで進むのであろうか。

できれば、卒論指導に関して提出前にメンター以外の有識者(学科内、学内にいるケースが多い)の指導も得られる方式を検討すべきであろう。学科内では当然のことながら、学科を超えても、ということである。

教員ひとりひとりも、これを重荷とせず専門家として指導を喜びをすべきであろう。これがアドホックの指導ではなく、これを可能とする体制づくりが必要ではないか。

反転授業・アクティブラーニングに関して、学習効果が高かったと学生が感じた事例を共有し、相互に参考にできる体制があると、大学全体として教育効果の向上につながると思われる。

5. 授業評価に関する感想、要望

回答されたものについては、概ね良好な回答状況でした。ただ回答数が少ないので、比較的评价の高い学生が回答しているようですので、もう少し幅広い学生から回答が得られるようにすることが必要なと思いました。

授業内容や講義資料については、「分かりやすかった」「勉強になった」というコメントが多くを占めたので、現在の方向性で質の向上に努めていきたい。授業内では、社会全体で意見が分かるような論争的な話題もいくつか扱ったが、教室内でのディスカッション等はあまりできなかったので、そのような時間を確保できるよう、講義内容を精選して時間配分を工夫したい。

コメントを書いた学生は概ね満足をしているようだが、授業を理解することが難しい学生もいるのだろうということを数値から読み取った。日頃声を発する学生は積極的な学生が多くもっと難しいことも教えて欲しいと言うが、そうではない層も教室にはいることを考慮し、今後どう対応するのが両者にとって良いのか考えていきたい。今年度までは教職課程の関係でシラバスの自由な変更ができず、ディスカッションをするということがシラバスに書いてなかったのにディスカッションを行ったことについてクレームが1件あった。

できれば、学生に求めるこの調査は、かつてのような「紙ベース」のものを授業内で書かせる方が、学生からの回答率がよいと感じられる。ペンを持って紙に書くという身体的作業は、やらねばならないという責任感や、よく考えて言葉を選び伝えるという傾向を助長するからである。

これらの情報を活かして、有効な取り組み内容としてフィードバックしていただければと思います。

回答率がなかなか上がらないので、効果的な依頼の仕方などを全学的に検討して頂きたい。

この形式のアンケートになって回答しやすくなった。

1. 授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

授業の目標達成度については満足の行く結果が得られている（概ね8割の授業において、授業の目標は「達成できた」、残りの2割も「ある程度達成できた」）。学生の取り組みについては、授業ごとに差異はあるが、全体として満足度は高いとの結果が得られている。

2. 目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など

（他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください）

特筆すべき工夫としては、事前学習で扱うテキストについてコメントを付し、これを受講者間で共有するという方法を取っている授業があった。

3. 今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

哲学の学習は単純な積み上げ式のカリキュラムではないことから、学生の中に系統的な学びを学生が主体的に設計できるような指導が一層必要であると考えられる。

4. 学科・専攻コースの立場として大学に望むこと（意見、提言など）

入学者の多様化が進む中、学生の学習履歴について必要であれば、教員が閲覧できるシステム、特に成績不良などの問題のある学生についてあらかじめ把握できるシステムが有るのが望ましい間意見があった。また、生成系 AI によるレポートの作成などについて、大学としてのルールの確定と学生への周知を望むという意見があった。

5. 授業評価に関する感想、要望

半数程度の授業で、授業アンケートの回答率が低いという所見が見られ、改善の方策を検討する必要がある。

1. 授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

14件（14授業）の回答中、「1. 達成できた」が3件、「2. ある程度達成できた」が11件であった。「教育学」の教員であり常に謙虚に授業改善に取り組む姿勢があるため「2. ある程度達成できた」という自己評価が多いと考えられるが、特段問題なく、授業の目標達成がなされていると考える。コロナ禍明けの課題多い中、学生一人ひとりに丁寧にかかわり、耳を傾け、学生主体の学習を進めることができていると考える。

2. 目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など

（他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください）

教育学科として、以下のような実践例が見られた。

- 1 パワーポイント、2 レジюмеなどの配付資料、3 文献などの資料・史料、
- 4 教科書・問題集などの教材、5 視聴覚教材、6 プレゼンテーション、7 ロールプレイング、
- 8 グループディスカッション、10 グループワーク、11 ゲストスピーカーの招聘、
- 12 ICT ツールの活用、13 学内システム（Sophie、Google ドライブ等）、
- 14 教室（座席の変更ができる教室・演習室など）、15 予復習の課題、16 授業内での課題、
- 17 私語への注意、対応、19 厳格な出欠席、21 シラバスの工夫、などの実践例が見られた。

※9 ディベート、18 小テスト、20 授業の時間帯、22 その他、23 特になし、は見られなかった。

3. 今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

教育学科として、以下のような課題があるという意見が出た。

- ・本学らしさの追究。
- ・効率化を図る流れの中で、教育学科では地道に積み上げる事の大切さについて学生が考えられる機会を作ることが大切なのではないか。
- ・この授業は、資格取得とも関連するので、特にそうであるが、実際の現場での（現実的）課題にまず触れ、高い意識のもとに主体的に課題解決をはかっていく過程の経験が効果的であったが、これを授業時間内だけではなく、予習・復習を通して、またその際に個人だけではなくグループで探究できるようにしたい。
- ・残念なことであるが、多くの課題が出された授業の予習（次の時間の）をこの時間にこなそうとしている学生が教室の後ろの方を中心に見受けられる。この授業で、もし多くの課題を出し

た場合に、他の授業でもそのようなことが起こることが予想される。悩ましい問題であるが、時間をかけて解決していかなければならない。

- ・来年度からシラバスに予習・復習の時間が示されたことは1つの方策ではあるが、これがQ2の質問の結果に反映されるのには(全ての授業において)、時間割の余裕、そして学生とともに自戒を込め我々の意識や実際の行動が変わらなければならないと思う。
- ・最新の機器への対応(特にMacのPC対応)。
- ・学習支援センターの環境が整っていることで学生は円滑に学ぶことが出来た。ICT活用によって授業時間外の学修が充実するような継続的な環境整備と支援が必要である。

4. 学科・専攻コースの立場として大学に望むこと(意見、提言など)

教育学科として、以下のような意見が見られた。

- ・机が移動しにくく、グループワークがしにくい。もっと可動性の高い机にかえることはできないか。
- ・SNSの環境や、様々な機材の整備が十分ではない教室があり、Wi-Fiに繋がりがつらかったり、整備されているものが古い機種などで映像を見ることができない教室もある。学習環境の整備を切にお願いしたい(特に2号館)。それらがスムーズに行くことで、学生も積極的に授業に参加できると思われる。
- ・授業アンケートで、「教室の椅子と机の高さがあってなくていつも体が痛いです。(…)これは授業に関わらず3号館の机すべてに当てはまります」というコメントが寄せられた。個人差がある問題なので対応はなかなか難しいと思うが、一応、情報共有をさせていただきたい。
- ・今、取り組むべき(取り組める)こととして、履修要覧には各学科の(アドミッションポリシー)、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、卒業生像、カリキュラムマップ、各授業科目という明確な、ある意味「逆向き発想」で履修過程が示されるようになったことはよいと思うが、履修要覧にしめされたこの履修過程あるいはディプロマポリシー、カリキュラムポリシーと各授業科目との関係性というか位置付けがより理解できるようなわかりやすい示し方の工夫が必要ではないかと思う。例えば、単純なことであるが、全学ディプロマポリシー、各学科ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、学科専門科目、自由選択科目などのワードの関係を図示し、最初に示すというように。極めて当たり前と我々が思っていることが、意外に学生に伝わっていないのではないように感じる。今回の調査でQ5のシラバスの記載内容に関する質問でもどちらともいえないという回答が少なくなかったが、シラバスに記載されていることについても、成績評価のところは別としても、学生がきちんと理解しているか不安である。教員個人として、授業開始時にきちんと説明することも必要であるが、学科や大学としても、できるだけわかりやすい可視化を工夫しながらガイダンスする必要があるのではないか。
- ・教室環境の改善。縦長の教室ばかりで人数の多い授業では後方に座席をとる学生の態度が悪くなる。
- ・1年次からの基礎学力の向上。大教室でもグループワークやディスカッションをしやすいように、可動式の机と椅子を導入すること。

5. 授業評価に関する感想、要望

教育学科として、以下のような意見が見られた。

- ・ 学生の本音がどこまで反映しているのでしょうか
- ・ 授業担当者が実践現場とのつながりが深いため、保育者という仕事の生の姿を多くの資料や事例を提示することができる。そこから多くを学んだことが意見からうかがえる。
- ・ 今回授業時間内での実施が難しかったので、本日中の回答を求めたところ、回収率が低くなってしまった。次年度以降は、授業内実施としたい（全学的にもそのようにしたほうがよいのではないか）。

以上。

1. 授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

報告書が提出された全ての科目において、目標達成度は「達成できた」「ある程度達成できた」であった。

2. 目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など

(他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください)

- ・学生自身が活動したり、チームで議論したりするという授業は効果的だったと思う。
- ・授業の途中で pair share という手法で、学生同士で講義内容を説明し合うというワークを行った。授業内容が多いので、毎回ではできなかったが、学生からは理解が進んだと好評だった。
- ・授業毎に前回のリアクション課題の意見や質問にフィードバックすることで、学生たちの関心の高いテーマを取り上げることが出来、課題への取り組みがよくなったと感じています。
- ・履修者が 100 名を超え大人数のため、講義形式とならざるを得ず、学生の理解度や反応を見るために、毎回リアクションペーパーを提出してもらった。次の回で質問に回答するとともに、印象深い内容についてフィードバックをした。
- ・関心を持ってもらうため、視聴覚教材（心理臨床現場を取材したもの）を取り入れたり、外部講師（家裁調査官、スクールカウンセラー）を招いてお仕事紹介をしていただいた。
- ・心理学入門では 300 名程度の学生が受講しているが、必ず課題を出し、そのフィードバックも講義内で行っている教員が多いため、双方向性の講義が可能となっていると考える。
- ・感染症によってオンライン講義をよぎなくされた年度以降、オンラインで実施としている。以前は抽選を行っていたが、オンラインとすることで、より多くの 1 年生の受講が可能となった。心理学の入門として本学心理学科の教員全員の専門を多くの学生に伝えることができていると考えられる。

3. 今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

- ・学問として心理学に興味を持ってもらうように、身近な出来事に関係する内容を取り入れていくこと。
- ・2 年～4 年まで様々な学年の学生がいたため、多様な学習段階の学生の交流を盛んにさせるような取り組みがあってもよかった。
- ・聞くだけではなく、学生がプレゼンするなどの工夫が必要。
- ・人数が多い講義では工夫をして一方通行ではないよう努め、本学の特徴でもあるきめ細やかな指導という意味ではゼミのような人数の少ない講義で、個々をより大切にしたい指導をすることが重要だと思われる。
- ・ゼミをより充実化させるためには、週 1 回 1 コマというのは無理があるように思っている。集中的にできるといいかもしれないと思っている。

4. 学科・専攻コースの立場として大学に望むこと（意見、提言など）

- ・総合現代教養演習（今年度は金曜後期 3 限）のように学科・専門を超えた講義が増えるといいと思う。
- ・心理学統計法はできれば TA がいたほうが良いと思いました。

5. 授業評価に関する感想、要望

- ・学部は Google Form で、大学院はワードになったりしているので、フォーマットを統一してほしいです。
- ・他の大学では学生のアンケート結果にはそれに付随して返答する機能が設けられていましたが、このアンケートが最終的に何にアウトプットされるのか、いただいたメールだけでは理解できません。各教員の担当教科ごとにエクセルフォームなどを共有してくれたほうが漏れなく作業できるように思われます。
- ・アンケートの質問項目が「効果的な授業方法」などと記載されていて、効果的な授業をしたことが前提となっていて、全体として授業はうまくいっていても、反省のない授業はないので違和感を持ちます。この調査の趣旨は、おそらく授業の良い部分や悪い部分を振り返って次年度の授業に繋げていくためのものだと考えると、授業の中で発生した問題や課題、次年度へどう活かしていくかといった部分を質問項目に入れたほうが、教員として授業を振り返るきっかけになると思いました。
- ・「学科・大学全体として取り組むべきこと」という項目を各授業の報告として書かせる意図が分からないです。大きな話題すぎて、授業とは必ずしも関係なくなるような気がします。
- ・Google Classroom で案内したうえで、最終授業の時間内に少し時間を取ったのですが、回答していない人も多かったのは残念でした。回答内容は匿名でも、回答したかどうかのチェック（授業の出欠に反映）ができればと思います。

第4章 グッドティーチャー賞の推薦

本年度は他と比べ顕著に評価が高かった教員が特定できず、グッドティーチャー賞は該当者なしとした。

2023 年度 専任教員授業報告書 (〇〇学科)

本報告は本年度のご自身の授業を振り返っていただくと同時に、個々の先生方のご経験やご意見を全学的に役立たせるための資料として使わせていただきたいと思います。学生の授業評価の集計結果とともに整理して掲載させていただきたいと思います。よろしくお願いたします。

所属学科を選択してください。(プルダウンで選択)

氏名 (役職)

授業科目名

授業形式 (ラジオボタンで選択)

1. ゼミ・演習

2. 講義

その他:

Q1. 本授業では目標をどの程度達成できたと思いますか。 (ラジオボタンで選択)

1. 達成できた

2. ある程度達成できた

3. あまり達成できなかった

4. 達成できなかった

Q2. 目標を達成する上で効果的だった方法や工夫はどのようなものですか。 (複数回答可)

1. パワーポイント

2. レジューメなどの配付資料

3. 文献などの資料・史料

4. 教科書・問題集などの教材

5. 視聴覚教材

6. プレゼンテーション

7. ロールプレイング

8. グループディスカッション

9. ディベート

10. グループワーク

11. ゲストスピーカーの招聘

12. ICT ツールの活用

13. 学内システム (Sophie、Google ドライブ等)

14. 教室 (座席変更のできる教室・演習室等)

15. 予復習の課題

参考資料

16. 授業内での課題
 17. 私語への注意、対応
 18. 小テスト
 19. 厳格な出欠席
 20. 授業の時間帯
 21. シラバスの工夫
- その他:

Q3. 教室設備（空調・ICT 機器・マイク等）や通信環境に問題がありましたか。

1. 特に問題はなかった⇒Q4 へ
2. 問題があった⇒問題があった教室もしくはオンライン環境についてお聞かせくださいへ

例) 205 番教室 プロジェクタの色や鮮明度に問題があった。

オンライン Wi-Fi がつながらない。つながりにくい。 など

- ① 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について（ご自身のことでなくても結構です）
- ② 学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について
- ③ 学科や大学全体として取り組むべきことについて
- ④ アンケート結果について（結果について・学生のコメントなど）
- ⑤ 「授業に関する調査」についての意見、提言など
- ⑥ その他

ありがとうございました。

